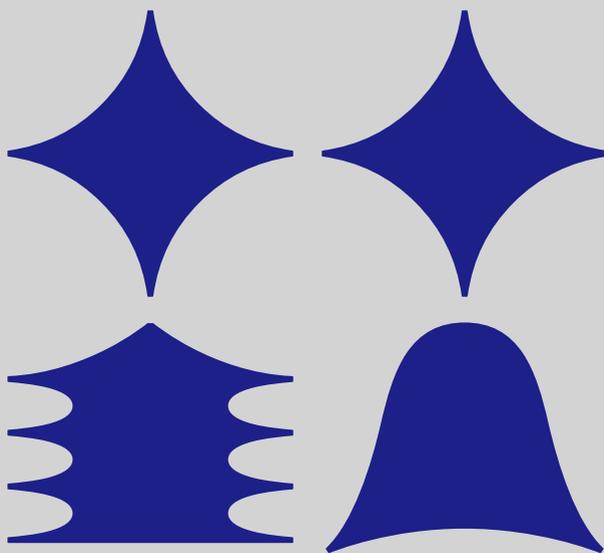


芸術公社アニュアル
2015-2016

Arts Commons Tokyo
Annual Report 2015-2016



芸術公社

ARTS COMMONS
TOKYO

2015 - 2016



芸術公社アニュアル

**Arts Commons Tokyo
Annual Report**

2015-2016

ごあいさつ

芸術公社が正式に発足して1年が経過しました。2015年1月に開催された設立シンポジウムを皮切りに、日本およびアジア各地で、公演、シンポジウム、ワークショップ、レジデンス、ウェブ・プラットフォーム、リサーチなど、多数のプロジェクトが同時平行で展開中です。そのすべては芸術公社の理念を体現するための、小さいながらも具体的なアクションであり、いずれも明確なビジョンと必然性のもと企画、実施されています。

このアンニュアルは、全容が把握しづらい芸術公社の個々のプロジェクトを横断的に記述し、芸術公社というコレクティブの総体を可視化する目的で編集されています。つまり、芸術公社の最初の会社案内とも言えるものです。私たちは何者なのか。そしてどこへ向かおうとしているのか。このアンニュアルが、今、アジアのあちこちで動きはじめた芸術公社の活動を把握するツールとして、これから芸術公社となんらかの接点をもつ皆様にとって有効なものとなれば幸いです。

1年間でこれだけの事業を展開できたのは、芸術公社のスタートアップを応援して下さったご寄付者の皆様、助成や会場の提供をくださった企業や文化機関の皆様、そして芸術公社が作り出す場に好奇心と友情をもって参加して下さったすべての皆様のおかげです。この場をお借りして、心より御礼を申し上げます。

2016年3月

芸術公社代表理事 相馬千秋

CONTENTS

芸術公社アンニュアル
2015-2016
Arts Commons Tokyo
Annual Report
2015-2016

page

02	ごあいさつ
03	目次
04	芸術公社のミッション
05	4つの事業カテゴリ

PROJECT 芸術公社2015-2016 プロジェクト

08	芸術公社2015-2016 活動マップ
09	芸術公社2015-2016 活動カレンダー
10	01 芸術公社設立記念シンポジウム
12	02 饗宴のあと アフター・ザ・シンポジウム
16	03 みちのくアート巡礼キャンプ2015
20	04 read (レジデンス・東アジア・ダイアログ)
24	05 レクチャーパフォーマンス・シリーズ
28	06 SCENE / ASIA:アジアの観客空間をつくる
32	07 国際シンポジウム 都市と祝祭:芸術的想像力はいかに都市を覚醒するのか

DIALOGUE

34	相馬千秋×ゴン・ジョジュン対談 「東京と台南。二つの芸術公社、発足の年を振り返って」
----	---

DIRECTORS 芸術公社のディレクターによるエッセイ

42	「commons」の意味 ウィリアム・アンドリュース
43	アジアの時間と場所が、対等に出逢うプラットフォーム 岩城京子
44	ドイツに住む外国人として感じる芸術と社会の関係 宇波恵
45	「レクチャーパフォーマンス・シリーズ」を中心に 大館奈津子
46	批評的態度を持って、社会と向き合う 影山裕樹
47	日本の舞台芸術と「公」 鈴木理映子
48	社会の創造に立ち向かった1年 須田洋平
49	お金のことをやった1年 相馬千秋
50	芸術公社設立1年を経て 平昌子
51	「レクチャーパフォーマンス・シリーズ」を終えて 戸田史子
52	「社会」へのまわり道 林立騎
53	近くから伝えること 望月章宏
54	われら独立自尊の仕事人 若林朋子

55	クレジット
----	-------

芸術公社のミッション

芸術が今日の時代と社会に応答し、未来に向けてあらたな公共理念や社会モデルを提示しうるものであるという認識のもと、同時代芸術に関わる事業の企画および実施を通じ、日本およびアジア地域の芸術文化振興に寄与します。

芸術公社では以下の4つのアプローチで、上記ミッションの実現に取り組みます。

1

「あたらしい公共」を提案し、体現する

インディペンデント(個)とパブリック(公)をつなぐ「あたらしい公共」として、公共、民間問わず多様なイニシアティブと連携しながら、芸術文化を通じ、あらたな社会モデルを提案、体現します。

2

時代と社会に応答するあらたな芸術の方法論を提唱し、実践する

「芸術のための芸術」ととどまらず、歴史や社会から思考し、問いを立て、現実の社会に影響を与えうる同時代芸術の形を探求し、その方法論を提唱、実践します。

3

異なる専門性を持つディレクターによるコレクティブ

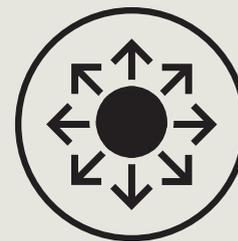
上記理念を体現するために、プロデューサー、エディター、リサーチャーなど異なる専門スキルを持つ複数のディレクターがプロジェクトごとにユニットを組み、ディレクター・コレクティブとして活動します。

4

アジアにおけるプラットフォームを目指して

国内のみならず、アジア、世界において上記理念を共有する個人や組織と連帯し、アジアの諸地域で活動を展開、同時代芸術のためのプラットフォーム形成を目指します。

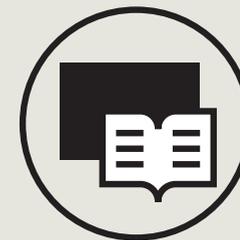
4つの事業カテゴリ



PRODUCE

プロデュース事業

国内外の文化機関やイニシアティブとの連携のもと、各種アート作品やプロジェクトのプランニング(企画)、プロデュース(製作)、ランニング(運営)を行います。



MEDIA

メディア事業

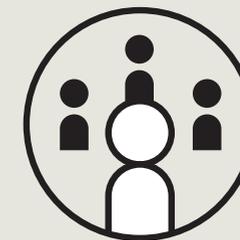
同時代表現に関する情報や言説を、地域や時代を超えた公共財として共有・継承するため、多様なメディアを駆使した編集・出版・発信を行います。



THINK TANK

シンクタンク事業

国内外の研究機関、助成機関等との連携のもと、文化政策、都市計画、観光、アートマネジメント等、複数の専門領域を横断する研究調査(リサーチ)を行い、その成果を政策提言へと発展させます。



EDUCATION

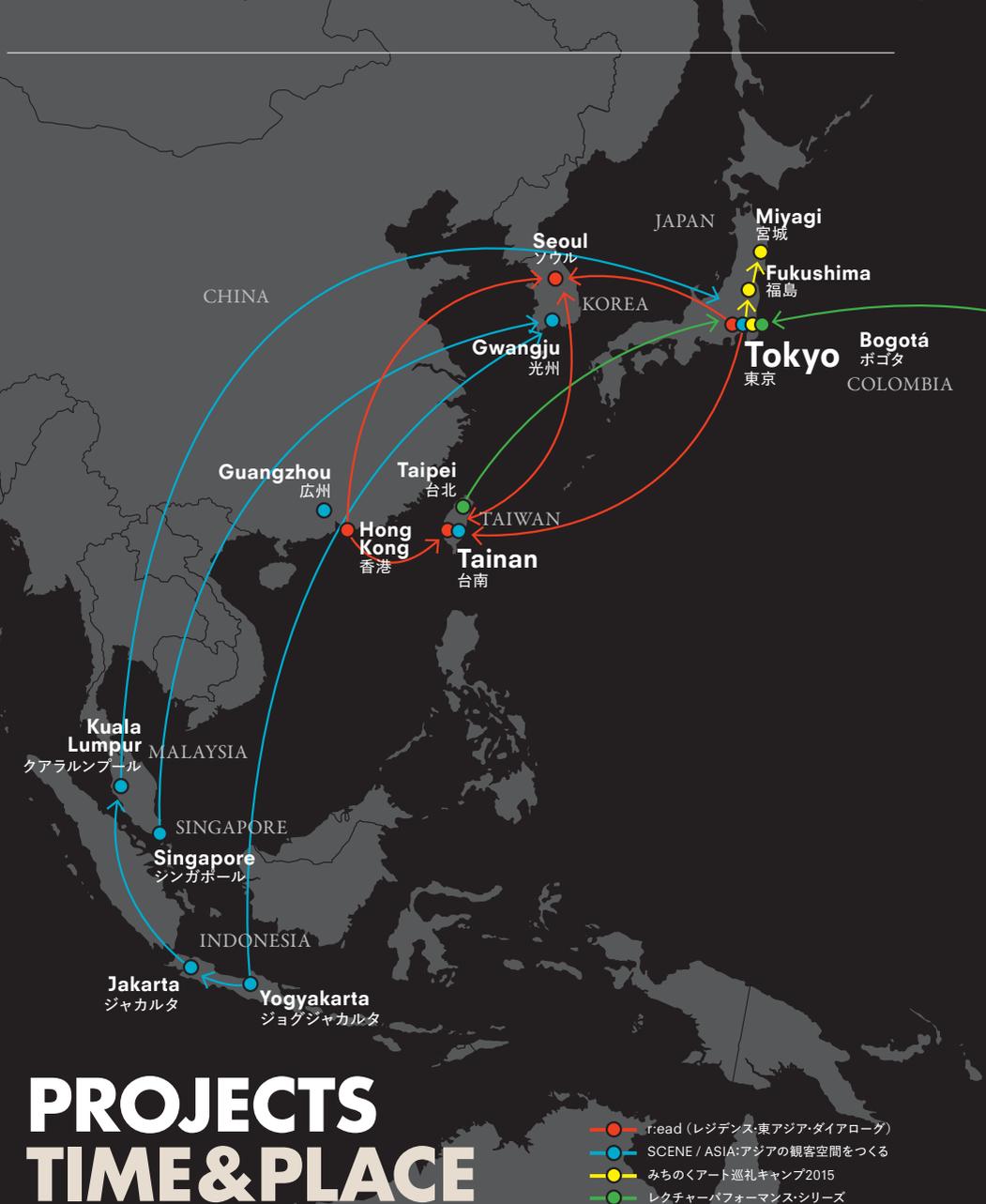
教育・基盤整備事業

時代と社会に応答し、国際的視野で活躍する人材や観客の育成を目指し、自治体、教育機関、企業へのアウトリーチも含め、教育プログラムの開発・実践を行います。また、芸術創造環境の基盤を長期的に整えることを目指し、各種パイロット事業を展開します。

PROJECT

芸術公社2015-2016 プロジェクト

芸術公社は、2014年の発足から2016年3月までに合計7つのプロジェクトを実施した。小さなチームでリサーチやディスカッションを続けるものから、展覧会、パフォーマンス公演、シンポジウムなど広く一般に公開するものまで、活動は多岐にわたる。



PROJECTS TIME & PLACE

*シンポジウムや公演、展示などのイベントについては開催日のみを記し、準備・報告等の事前事後は含まない。

month	2014	2015	2016
8			04 r:read (レジデンス・東アジア・ダイアログ) 9.30-10.13 r:read #3 in 台湾
9			
10			
11			
12			
1	01 1.23 芸術公社 設立記念 シンポジウム	02 1.17-4.7 饗宴のあと アフター・ ザ・シンポジウム	
2			
3			
4			
5			
6			06 SCENE / ASIA: アジアの観客空間 をつくる 7.20-23 第1回ミーティング (シンガポール) 9.8 キックオフイベント (韓国)
7			
8	03 8.2-8.30 みちのくアート巡礼キャンプ2015		
9			
10			
11			05 レクチャー パフォーマンス・ シリーズ 11.15-25 r:read #4 in 韓国
12			
1			
2			
3	07 3.15 国際シンポジウム 都市と祝祭:芸術的想像力は いかに都市を覚醒するのか		
4			
5			
6			
7			



01

Arts Commons Tokyo Symposium

2015
1.23

MEDIA | EDUCATION



芸術公社 設立記念シンポジウム

2015年1月23日 SHIBAURA HOUSE

主催 | 特定非営利活動法人 芸術公社
会場協力 | SHIBAURA HOUSE

参加ディレクター
ウィリアム・アンドリュース
岩城京子
大館奈津子
影山裕樹
鈴木理映子
須田洋平
相馬千秋
平昌子
戸田史子
林立騎
望月章宏
若林朋子

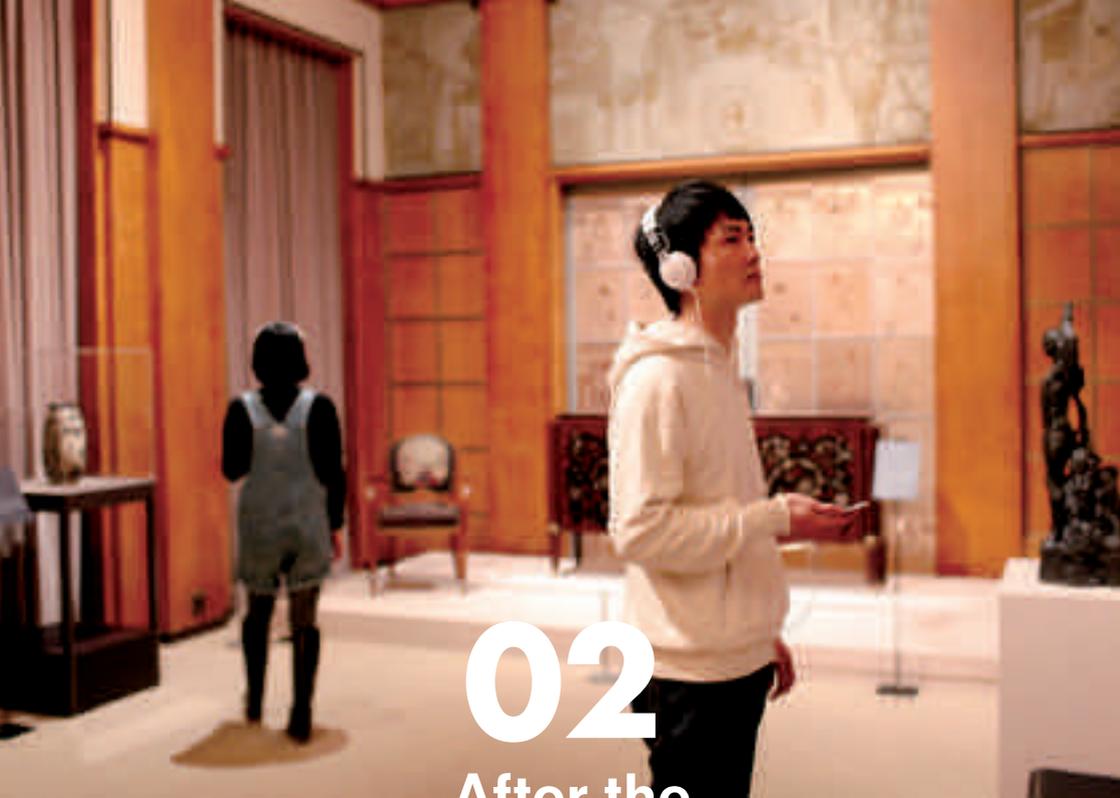
ゲスト
ゴン・ジョジュン
[台南芸術公社]
佐藤直樹
[ASYL]

2015年1月23日、東京・田町にあるSHIBAURA HOUSEにて、芸術公社の設立を記念したシンポジウムを開催した。芸術公社のロゴのアートディレクションを行ったASYL佐藤直樹氏、台南芸術公社を立ち上げたゴン・ジョジュン氏をゲストとして迎え、芸術公社の設立メンバーがそれぞれ本法人における今後の活動の意気込みについて語るという内容だ。

まず佐藤氏は、人が土に苗を植える様子を示した「芸」という文字をイメージして芸術公社の象徴的なロゴを制作したことを説明し、ゴン・ジョジュン氏は、東京の芸術公社とパラレルなかたちで台南芸術公社を設立し、すでにスペースの運営に着手している様子を紹介した。その後は本法人の名称となっている「芸」「術」「公」「社」のキーワードをもとに、設立メンバーから12名のディレクターが、来るべき時代に応答するあらたな芸術の方法論とその実践の可能性について議論した。

相馬千秋は、ディレクター・コレクティブである芸術公社の特徴についてこう語る。「アート現場では、通常、アーティストが自分の信じる価値観を、作品を通じて表現しています。プロデュースしたり、批評したり、翻訳したりする我々のような人間は、それをいかに社会につなぐかを常日頃考え、実践しています。芸術公社では、『つなぎ手』の人間たちが、実際の経験や思考のなかから生まれてきた言葉を発していきます。」

プロデューサー、弁護士、批評家、編集者、パブリシストなど様々な立場で、それぞれのスキル/ディシプリンに応じて芸術と社会の接する面を探り続けてきた職業家である我々は、今後、芸術公社というプラットフォームを通して互いの知見を共有し、その成果を様々な事業に落とし込んでいくことになるだろう。[影山裕樹]



02

After the Symposium



2015
1.17 -
4.7

PRODUCE



饗宴のあと アフター・ザ・シンポジウム

2015年1月17日-4月7日 東京都庭園美術館 本館

プロデューサー
相馬千秋

アーティスト
藤井光
[美術家・映画監督]

深田晃司
[映画監督]

鈴木治行
[作曲家]

声の出演
足立誠
井上みなみ
川隅奈保子
堀夏子

スタッフ
録音 | 藤口諒太
アプリ開発 | 小林和貴
チラシ、サインデザイン |
大岡寛典事務所

主催 | 公益財団法人 東京都歴史文化財団 東京都庭園美術館
企画・制作 | 特定非営利活動法人 芸術公社
協力 | WOOX INNOVATIONS

鼎談記事掲載ウェブサイト | <http://artscommons.asia/reports/teidan>

東京都庭園美術館から依頼を受け、芸術公社初のプロデュース事業として企画・制作したオーディオ・ツアー作品。美しいアールデコ様式で知られる庭園美術館の建物は、戦前は朝香宮鳩彦王とその家族の邸宅として、戦後は吉田茂内閣総理大臣兼外務大臣の公邸として、高度成長期は民間に払い下げられ白金プリンス迎賓館として使用された歴史を持つ。藤井光らクリエイションチームは、日本近代史の華やかな表舞台を生きたこの建物をいわば「歴史の器」と捉え、ここに暮らした皇族の手記や国立国会図書館等に所蔵されている公文書など、膨大な歴史資料のリサーチから創作を開始した。歴史資料から知りえた事実やディテールを部屋ごとに振り分け、深田晃司がそこで起こったかもしれないフィクションとしてシナリオを執筆、藤井がそのシナリオを再構成する過程で大幅に抽象化し、鈴木治行がそれらを音響による統一された体験へと昇華させた。観客は事前にスマートフォンのアプリをダウンロードし、そこから再生される音源をヘッドフォンで聴きながら1時間程度館内を回遊する。そこでは過去・現在・未来の三つの時間がドキュメントとフィクションの間で交錯し、その場にありえたかもしれない物語が浮かび上がる。[相馬千秋]

かつて皇族の邸宅だった庭園美術館本館を使った、初の演劇／映画作品
過去・現在・未来、三つの時間の層をつなぐ、「観客／登場人物」の物語

1. ▶

「まだ、ここが美術館だった頃、ここにはヨーロッパから運び込まれた美しい家具や絵画が展示されていました…
ところが、ある日、それらがすべて運び出されてしまいました。
理由はよくわかりませんが、絵を抜かれた額縁だけは、そのままの状態で飾られ続けました。
そして長い年月が過ぎ、今では、暖炉の上の鏡は割れているし、お客さまの足もとの絨毯は引き剥がされ、天井からは電球が落ちてきます」

2. ▶

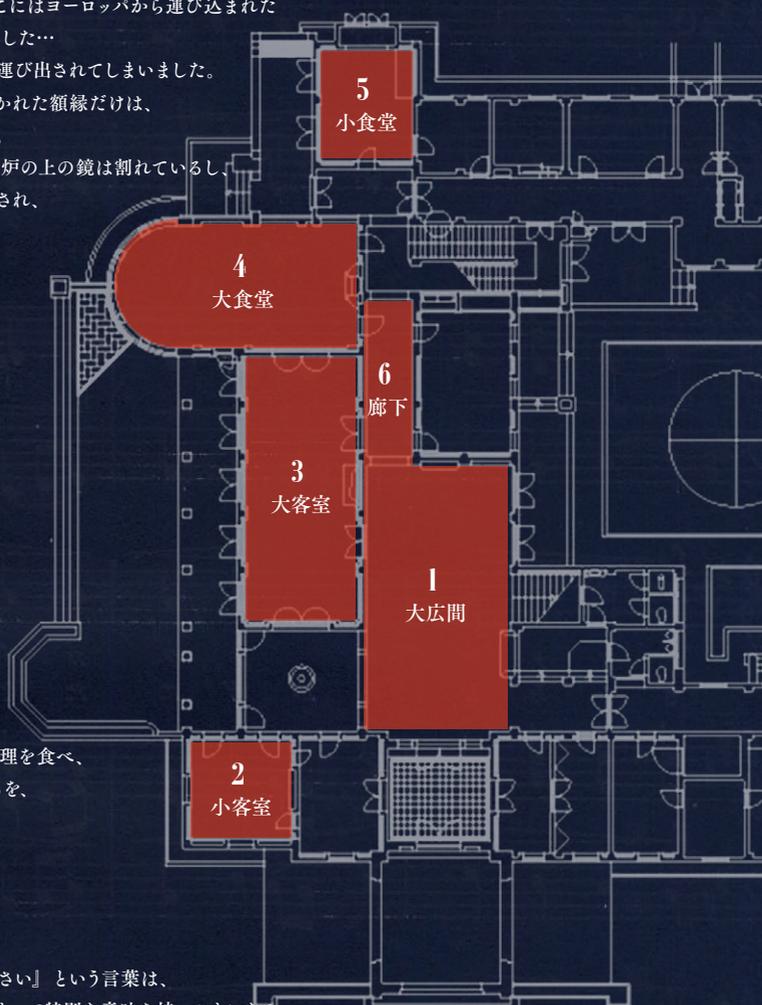
「ここには絵が描いてありました。
まだ、ここが美術館だった頃、この建物には、目の前にある作品を観察し、それを解釈する人々が訪れ、美術品を鑑賞してきました。
当時、それらの人々を「観客」と呼んでいたそうです」

4. ▶

「洋食を食べ、牛乳を飲み、肉料理を食べ、西洋絵画を描くようになった私たち、ヨーロッパは必要としています」

5. ▶

「『水を下さい』という言葉は、私たちにとって特別な意味を持つことになる。
私たちは聞いた。ヨーロッパで。
私たちは聞いた。アジアで。
『水を下さい』とうめく人々の群れを」



1F

6. ▶

「恋する者が最初に向かうべきは美しいフォルムでしょ」
「ルネ・ラリックの美しきガラス芸術みたいに」

7. ▶

「このレコードはここで見つかりました。
美術館から美術品が運び出された時、このレコードは置いていかれたようです」

9. ▶

「建築は記憶の器です。
私たちはここで、自分たちの置かれた立場を意識し、自分たちの利害について議論をするのです」

11. ▶

「あなたは観客を愚鈍化させるつもりですか。
人が何か決まったものを見て、何か決まったものを感じ取り、しかじかの帰結を引き出せるともお考えですか」



2F



03 Michinoku Art Pilgrims Camp 2015



2015
8.2-30

PRODUCE | EDUCATION



みちのくアート巡礼 キャンプ2015

東北から思考する、
新進芸術家・企画者養成集中ワークショップ

2015年8月2日-30日

福島県喜多方市、二本松市、宮城県仙台市など

文化庁委託事業「平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

主催 | 文化庁、特定非営利活動法人 芸術公社

制作 | 特定非営利活動法人 芸術公社

協力 | はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会、NPO法人まちづくり喜多方、

TRUNK Creative Office Sharing、Survivart

ウェブサイト | <http://art-junrei.jp/>

ディレクター

相馬千秋

キャンプ参加者

ヨル (荻島大河)

斧澤未知子

清水 翼

高橋創一

武田 力

檀原照和

二宮彩乃

久松知子

福田龍郎

三上 亮

村上愛佳

ゲスト講師

赤坂憲雄

[民俗学者、学習院大学教授、
福島県立博物館館長]

長内綾子

[キュレーター、Survivart主宰]

玄侑宗久

[作家、福島県三春町福聚寺住職]

高山明

[演出家、Port B主宰]

島山直哉

[写真家]

藤井光

[美術家・映画監督]

本江正茂

[東北大学大学院工学研究科
都市・建築学専攻准教授]

山内明美

[社会学者、大正大学特命准教授]

小森はるか+瀬尾なつみ

[アーティスト]

スタッフ

制作 | 浅野希梨、田村のこ

ウェブデザイン | 小林和貴

ロゴ、チラシデザイン | 松井健太郎

「みちのくアート巡礼キャンプ」は、①東北を知る、巡る ②東北から問いを立てる ③それを自分の表現や企画へと発展させる ことを主眼とした1か月集中ワークショップとして考案された。東北で今後なんらかの活動を志す若手アーティスト、企画者たちを公募し、選考を経て11名が参加。

「巡礼」とは何か? 「東北」「みちのく」とは何か? そして震災後、東北で表現するとはどういうことなのか? これらの問いを巡って最初に4泊5日の合宿を行い、東北から思考してきた民俗学者、宗教者、社会学者、アーティストらとの対話形式のワークショップを実施。その後参加者は自分の問題意識を作品や企画プランへと発展させるために、東北での個別リサーチやフィールドワークを展開。それを中間発表時に実作者の講師や仲間に批評してもらい、何度もブラッシュアップを行った。最終プレゼンテーションでは、「被災したパチンコ屋の自由の女神像を震災遺構として残すかどうかを巡る議論を作品化する」「三陸海岸を仙台から青森まで貫く国道45号線が通る、全33の自治体で33年間かけて毎年1作品ずつ演劇作品を上演する」など、ユニークなアイデアが次々と発表され、実現に向けたキックオフともなった。この企画は今後も継続され、参加者とともに「みちのくアート巡礼プロジェクト」として実現することを目指していく。

[相馬千秋]

Photo:Seo Natsumi

CONCEPT

東北から思考する、新進芸術家・企画者養成集中ワークショップ

みちのくアート巡礼キャンプは、

1|東北を知る、巡る 2|東北から問いを立てる 3|それを自分の表現や企画へと発展させる
ことを主眼とした1カ月集中ワークショップ。参加したのは、東北で今後なんらかの活動を志す11名のアーティストや企画者たち。震災がもたらした亀裂や揺らぎを、まだ見ぬ表現へとつなげていく。

1

「巡礼」をテーマにした
フィールドワーク、
ワークショップ

芸術表現と東北を切り結ぶテーマとして「巡礼」を掲げる。ワークショップ自体が複数の訪問地を移動しながら開催され、そこで行われる議論や創作も「巡礼」をキーワードに展開。

2

多様なメディアで表現する
参加者たちが
東北から問いを立てる

あえて表現ジャンルを限定せず、「東北から問いを立てる」ことに重心をおく。フィールドワークやリサーチはもちろん、民俗学者、宗教者、社会学者、芸術家らを招いての対話形式のワークショップを集中的に開催する。

3

成果発表は未来のプラン、
優秀なプロジェクトは実現へ

成果発表は、実作の提示ではなく、未来の作品やプロジェクトのプランを発表する形をとる。優秀なプロジェクトは、実際に東北での実現に向けて動き出すよう、講師や事務局がサポートする。

ROUTE MAP

プレゼンテーション/講評
公開イベント

8月29日[金] 17:00-21:00 30日[日] 13:00-17:00
会場 | TRUNK Creative Office Sharing (宮城県仙台市)

個別リサーチ/サテライト・ワークショップ

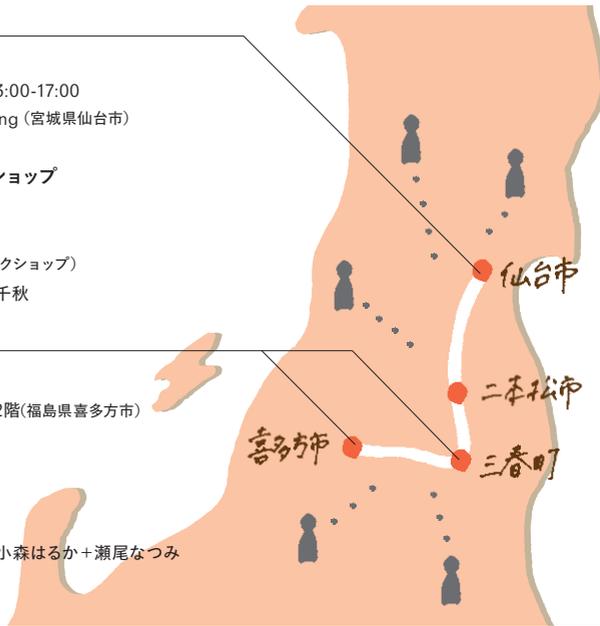
8月7日[金]-8月27日[木]
場所 | 東北地方全域(個別リサーチ)、
宮城県仙台市内(サテライト・ワークショップ)
講師 | 長内綾子、高山明、藤井光、相馬千秋

合宿ワークショップ

8月2日[日]-3日[月]
場所 | 大和川酒造北方風土館 郵便局2階(福島県喜多方市)
講師 | 赤坂憲雄、山内明美

8月4日[火]-6日[木]

場所 | 福島県二本松市、福島県三春町
講師 | 玄侑宗久、畠山直哉、本江正茂、小森はるか+瀬尾なつみ



PROCESS

8.2-3

合宿ワークショップ

全国各地から灼熱の喜多方に集まった参加者11名およびスタッフ。東北学の創設者赤坂憲雄氏、歴史社会学者の山内明美氏の講義で、他者・他所から名指された「みちのく」への理解を深めた。夜は喜多方の夏祭りを堪能。



8.4-6

合宿ワークショップ

猪苗代町にある「はじまりの美術館」見学を経て三春町へ。作家であり福聚寺住職である玄侑宗久氏から芸術・宗教・科学を横断する壮大な話を拝聴。その後二本松市へ移動し、畠山直哉氏、本江正茂氏、小森はるか氏+瀬尾夏美氏との対話型ワークショップで、震災後の「表現」の意味を問い直した。



8.17-18

サテライト・ワークショップ

10日後再び全員が仙台市に集合。個別リサーチ・フィールドワークの成果を一人ずつ発表。それを批評する4名のアーティストおよびキュレーターとの対話から、リサーチをプロジェクトに発展させるための作法や考え方を学んだ。



©Seo Natsumi

8.29-30

プレゼンテーション/講評

11名全員に等しく与えられた時間は30分。この1か月に練り続けた未来のプランとそれを支える自らの問いを発表。6名の講評者がそれに応答した。終了後のパーティでは、1か月のハードな集中キャンプで一人の脱落者もなくゴールを迎えたことを共に喜んだ。



©Seo Natsumi



04 r:read



2014
9-

PRODUCE | EDUCATION



r:read

(レジデンス・東アジア・ダイアログ)

r:read #3

2014年9月30日-10月13日 台湾(台南市、高雄市、台北市)

主催 | 国立台南芸術大学 視覚芸術研創中心
共催 | 特定非営利活動法人 芸術公社、米家芸文事業有限公司MIGA IDEA FARM、
国立台南芸術大学 教務処教学資源中心、雲嘉南区域教学資源中心
助成 | 台湾文化部、台湾教育部

r:read #4

2015年11月15日-25日 韓国(京畿道楊平郡、ソウル市)

主催 | Art Space Pool
共催 | 特定非営利活動法人 芸術公社
助成 | 京畿文化財団、独立行政法人 国際交流基金、韓国文化芸術委員会
協力 | Art Translators Collective

ウェブサイト | <http://r-read.asia/>

r:read #3 参加者
ディレクター
ゴン・ジョジュン [台湾]
相馬千秋

アーティスト
温又柔 [日本]
mixrice [韓国]
高俊宏 [台湾]
鄭波 [中国]

キュレーター
大川景子 [日本]
アン・ソヒョン [韓国]
林欣怡 [台湾]
羅小茗 [中国]

r:read #4 参加者
ディレクター
アン・ソヒョン [韓国]
チョ・ジウン [韓国]
ゴン・ジョジュン [台湾]
相馬千秋

トランスレーション・ディレクター
田村かのこ [日本]

アーティスト
竹川宣彰 [日本]
キム・ドンギョ [韓国]
陳伯義 [台湾]
鄭怡敏 [香港]

キュレーター
趙純恵 [日本]
イ・スンヒ [韓国]
賴依依 [台湾]
張嘉莉 [香港]

トランスレーター
池田リリィ茜藍 [中国語/日本語]
蔣雯 [中国語/日本語]
イ・チャンウク [韓国語/日本語]
チン・キョンドク [韓国語/中国語]
チョン・ヒョンソク [韓国語/中国語]

「r:read」(リード)は、東アジアにおける芸術や社会に対する問題意識を共有、発達させることを目的とし、日本・韓国・台湾・中国(香港)を拠点に活動するアーティストおよびキュレーターを招聘して行う対話型のレジデンス・プログラムである。2012年に東京で開始し、2014年より芸術公社と各国の参加者が協力して運営を行っている。「r:read」は、成果物の有無よりもそこに至る思考や議論の交換、共有の充実に重点を置き、それぞれの参加者が母語で対話に参加することを原則とする。2015年に韓国で開催した「r:read #4」では、「言語と植民」をテーマにそれぞれの問題意識について議論を重ねたほか、対話における通訳の重要性和その可能性を探るため「トランスレーター」という立場を明確化し、通訳者にも一参加者としてプログラムに積極的に参加してもらう方法をあらたに試みた。終了後は東京で報告会を実施、プログラムの中で生まれたアイデアや課題についてディスカッションを行った。各国の参加者も自国で報告会を行ったり、次の「r:read」開催に向けて意見を出し合ったりと、本プロジェクトが扱う問題を自身の問題として捉え、それぞれが主体的な活動を続けている。

[田村かのこ]

Photo: Yang Chulmo and Kim Jangwon from Bara Studio

CONCEPT Residency East-Asia Dialogue

レジデンス 東アジア ダイアログ

01 | 東アジアに特化

参加者の拠点地域を、日本・韓国・台湾・中国(香港)に限定。それぞれの地域からアーティストとキュレーターが2名1組で参加。

02 | 参加者全員が母語を話す

東アジアの複雑な歴史や、その過程で共通性や差異を孕んできた言語そのものにも向き合うために、参加者全員が母語を話すルールを設定。その通訳を行うトランスレーターたちも参加者と位置づけ、複数の言語や文化の間に生きる立場から対話に参加してもらう。

PLACE

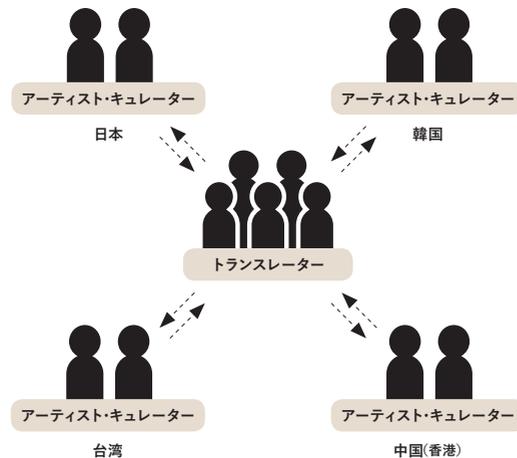
r:readの開催地リレー

2014年以降、「r:read」は毎年地域を変えて開催している。そのつど開催国のディレクターが加わるのも特徴のひとつである。



DIALOGUE

通訳を介して、参加者全員が母語を話す



03 | 「対話」から未来のプロジェクトを考案

滞在の目的は「制作」ではなく「対話」。東アジアの隣人との対話を通じて深めた問いを「未来のプロジェクト」へと発展させ、滞在最終日に1チーム2時間ずつ発表する。

04 | 東アジアの都市をリレーして開催

第1回、第2回は東京で開催されたが、第3回目からは以前の参加者がホストする形で、東アジアの諸都市を巡回。また毎回のテーマもホスト・ディレクターが設定している。



r:read #3 台湾でのリサーチ



r:read #4 韓国でのリサーチ

SCHEDULE

r:read#3 in 台湾 2014

- 9.30 台南市郊外にある国立台南芸術大学のレジデンス施設に集合、ウェルカムディナー。
- 10.1-2 国立台南芸術大学での記者会見、参加者による自己紹介プレゼンテーション、大川景子監督の映画『異郷の中の故郷』上映会など。
- 10.3-5 台南市内の4つのアールスペースやギャラリーを回遊しながら、地元のキュレーターやアーティストらと討論会を開催。
- 10.6 国立台南芸術大学近郊の古い集落やドラゴンフルーツの果樹園を訪問、アールスペースを運営しながらオーガニック養殖場を営む王さん手作りのスペシャルディナー。
- 10.7-8 各自リサーチ、発表準備。
- 10.9 高雄市へ移動、高雄最古の寺院「高雄開王殿」を見学。高雄市の芸術系書店で地元研究者らと討論。
- 10.10 台北市へ移動。北師美術館にて最終プレゼンテーションに向けた討論。
- 10.11 北師美術館にて中国・韓国・台湾・日本の順番で各チーム2時間ずつ、最終プレゼンテーションおよび参加者との討論。
- 10.12 最終ミーティング。



r:read #3 活動紹介冊子

r:read#4 in 韓国 2015

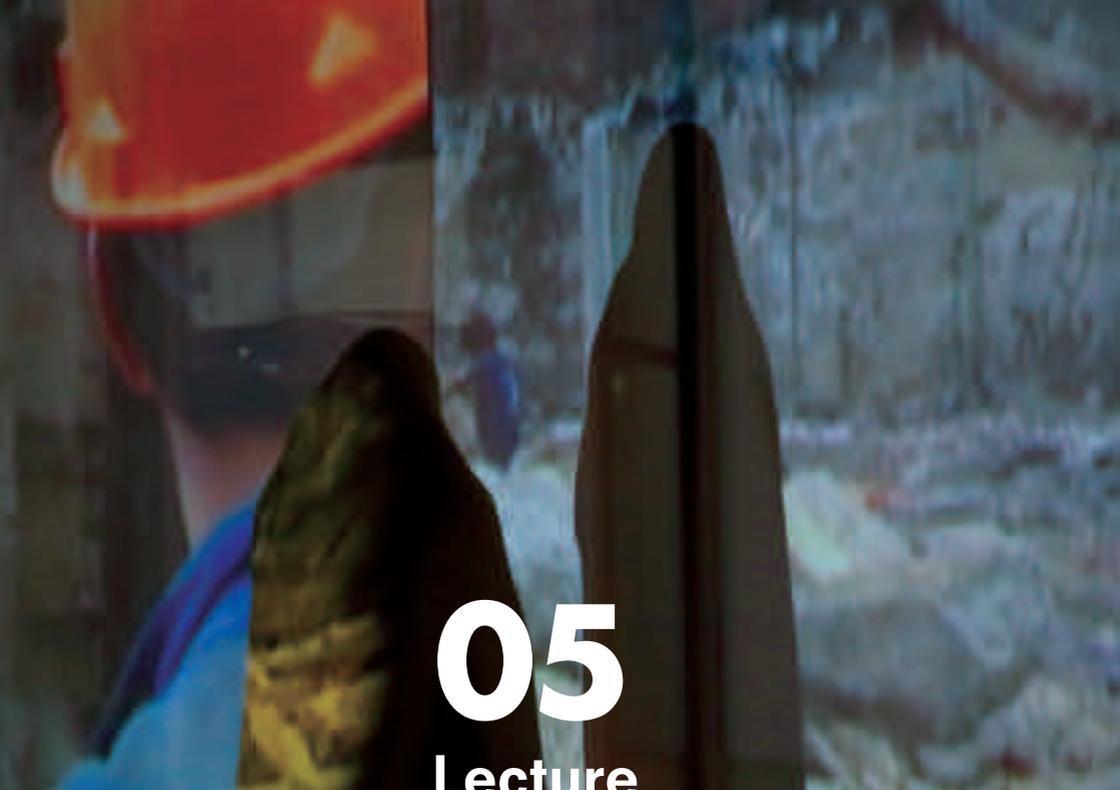
- 11.15-16 ソウルにあるインディペンデントのアールスペース Art Space Poolに集合、ウェルカムディナー。バスでソウル郊外の京畿道楊平郡内にある合宿施設 Kobacoに移動。
- 11.17 楊平郡内にある実学博物館を見学。同会場で参加者による自己紹介プレゼンテーション。
- 11.18 韓国人アーティスト、キム・ヨンギクのアトリエを訪問、キム氏と対話。
- 11.19 各自リサーチ、発表準備。
- 11.20 中間報告。夜には韓国の美学者イ・ヨンウックによる韓国近代美術史の講義。
- 11.21 かつてハンセン病患者居住区で現在は外国人労働者が多く住むマソ地区を見学。そこで「r:read#4」ディレクターの一人であるチョ・ジョジュン(mixrice)が展開したプロジェクトの紹介、討論。ソウル市内へ移動、美術館等見学。
- 11.22 オルタナティブスペース Slow Slow Quick Quickにて、イ・ミョンウォンおよびキム・ナムシーによる「言語と植民」に関するレクチャー。
- 11.23 チームごとにプレゼンテーション準備。
- 11.24 Art Space Poolで韓国・台湾・日本・中国の順番で各チーム2時間ずつ、最終プレゼンテーションおよび参加者との討論。



r:read #4 活動紹介冊子

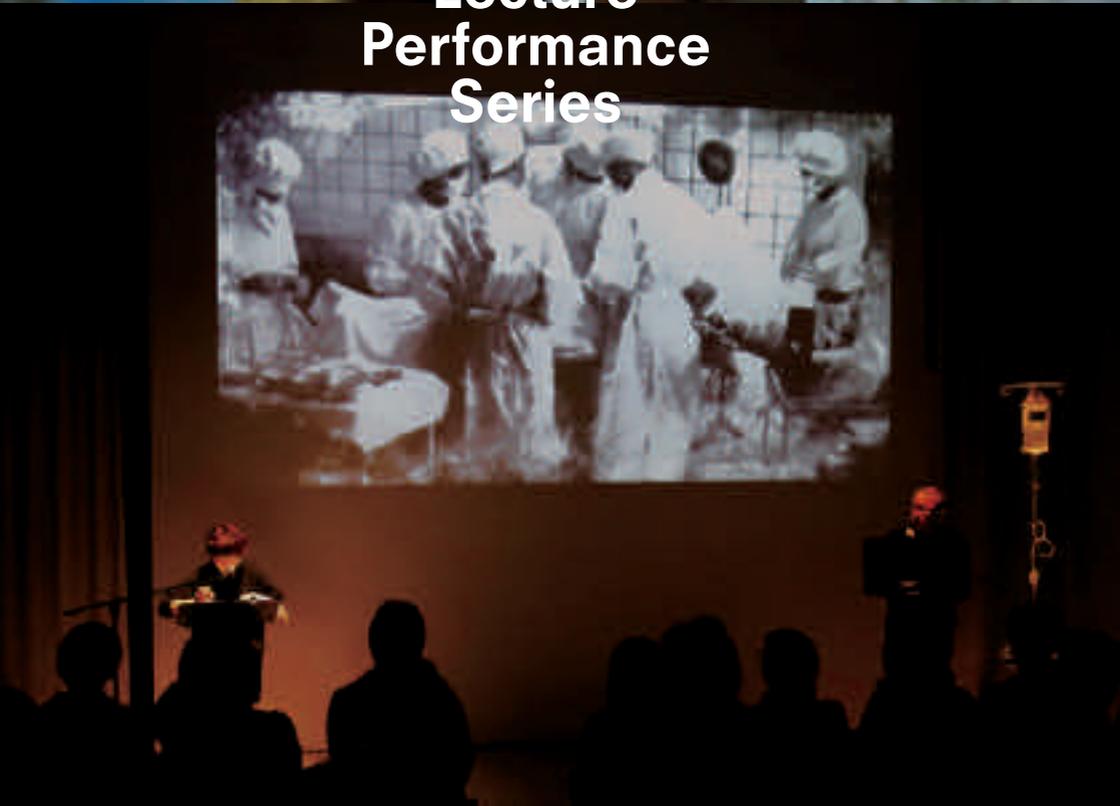


Photo: Yang Chulmo and Kim Jangwon from Bara Studio



05

Lecture Performance Series



2016
2-

キュレーター
大館奈津子
相馬千秋

制作統括
戸田史子

Vol.1『廃墟の証言』

構成・演出
ハイディ・アブデルハルデン、
ロルフ・アブデルハルデン

出演 | ロルフ・アブデルハルデン
映像・技術監督 | ヒメナ・ヴァルガス
製作 | マパ・テアトロ、
コロンビア国立大学
通訳・字幕翻訳 | 大谷賢二郎

コモンズ・トーク ゲスト
高山明 [演出家、Port B主宰]
高久潤 [朝日新聞国際報道部記者]
管啓次郎 [詩人、比較文学者、
明治大学大学院教授]

Vol.2『残響世界』

構成・演出・映像・出演
チェン・ジエレン(陳界仁)
アシスタント |
ホー・フェイティン(何惠婷)
出演 | 中藤奨
通訳・翻訳 | 池田リリィ茜藍

コモンズ・トーク ゲスト
藤井光 [美術家、映画監督]
港千尋 [写真家、多摩美術大学教授]
笠原恵実子 [美術家]

共通スタッフ
技術アドバイザー |
遠藤豊、中原楽 [ルフトワーク]
舞台進行 | 小林賢一
[infusiondesign]
記録映像 | comos-tv
記録写真 | 蓮沼昌宏
宣伝美術 |
新保慶太+新保美沙子
[smbetsmb]
ウェブデザイン | 小林和貴

PRODUCE



レクチャー パフォーマンス・シリーズ

Vol.1 ロルフ・アブデルハルデン / マパ・テアトロ(コロンビア)
『廃墟の証言』

2016年2月4日-6日 SHIBAURA HOUSE

Vol.2 チェン・ジエレン(台湾)『残響世界』

2016年2月16日-18日 SHIBAURA HOUSE

主催 | 特定非営利活動法人 芸術公社
共催 | 東京藝術大学大学院映像研究科 桂英史研究室・geidaiRAM
(平成27年度文化庁大学を活用した文化芸術推進事業)
助成 | アーツカウンシル東京(公益財団法人 東京都歴史文化財団)、
台北駐日経済文化代表処台湾文化センター
特別協力 | SHIBAURA HOUSE
ウェブサイト | <http://lecture-performance.com/>

「レクチャーパフォーマンス・シリーズ」はアーティストが自らの言葉で、自作について観客に直接語りかける形式のパフォーマンスである。アーティストによるレクチャーが溢れる現在、パフォーマンスの要素を含み持たせることで、より直接的かつ身体的な経験を観客にもたす。初回となる本年は、あえて厳しい環境下で作品を作り、国際的活動を続ける二人のアーティストを海外から招聘した。これには、表現の自由の危機がせまりつつある日本において、厳しい社会の現実に芸術はどのように応答できるかを、アーティストとして生き抜いている彼らの姿を通して、共に考えていきたいという我々の思いがあった。二人のアーティストはそれぞれ、SHIBAURA HOUSEという場所の特性を十分に生かした演出を創出し、2016年の東京という「いま、ここ」を映し出す公演を作り出した。各3日間という限られた公演期間ではあったが、「リビングアーカイブ」(アブデルハルデン)および「政治的なものを生み出す芸術的瞬間」(チェン)という二人の大きな考え方は、彼ら自身の身体を通して、より鮮明な印象を観客に与えた。今後もこのシリーズは継続的に回を重ね、世界の劇場や美術館との共同制作によりあらたな作品を生み出していく予定である。
[大館奈津子]

レクチャーパフォーマンス・シリーズ Vol.1

ロルフ・アブデルハルデン／マパ・テアトロ（コロンビア）

『廃墟の証言』 日本初演



舞台はコロンビアの首都、ボゴタ中心部、エル・カルトゥーチョ（弾薬筒）と呼ばれた伝説的スラム街。麻薬取引や売春、殺人が横行する一帯は、都市整備によって劇的に解体される運命にあった。ロルフ・アブデルハルデン率いるマパ・テアトロは、浄化計画が実行された5年間で、インタビューやワークショップなどを通じて土地に寄り添い、最終的には住民たちを俳優として『プロメテウスの解放』（ハイナー・ミュラー作）の上演を、廃墟となった街中で行った。その公演の記録や浄化されゆく街の風景、人々へのインタビューなどをアブデルハルデン自らが再構成し、語り直す「リビング・アーカイブ」として提示。レクチャーパフォーマンスという形式のあらたな可能性が開かれた瞬間となった。

ロルフ・アブデルハルデン／マパ・テアトロ
Rolf Abderhalden / Mapa Teatro

1956年コロンビア生まれ。中南米を代表する演出家、アーティスト、演劇理論家。ジャック・ルコック演劇学校を経て1984年マパ・テアトロを2人の妹とともに設立。2000年以降はボゴタのダウンタウンに同名の劇場も運営。ライブアートの理論と実践を基礎に、地域的・世界的な問いを多様なメディア（演劇、オペラ、映像、ラジオ、インスタレーション、パフォーマンス、都市プロジェクト）で表現し、独自の「地図作成」を続ける。アヴィニオン演劇祭、ウィーン芸術週間など世界の主要フェスティバルで作品を多数上演、世界的に高い評価を得る。またマパ・テアトロにおいて国際芸術祭「Experimenta sur」を企画・運営し実験的な創作プラットフォームを組織するなど、中南米のアートシーンを牽引する存在となっている。ボゴタ在住。

レクチャーパフォーマンス・シリーズ Vol.2

チェン・ジエレン（台湾）

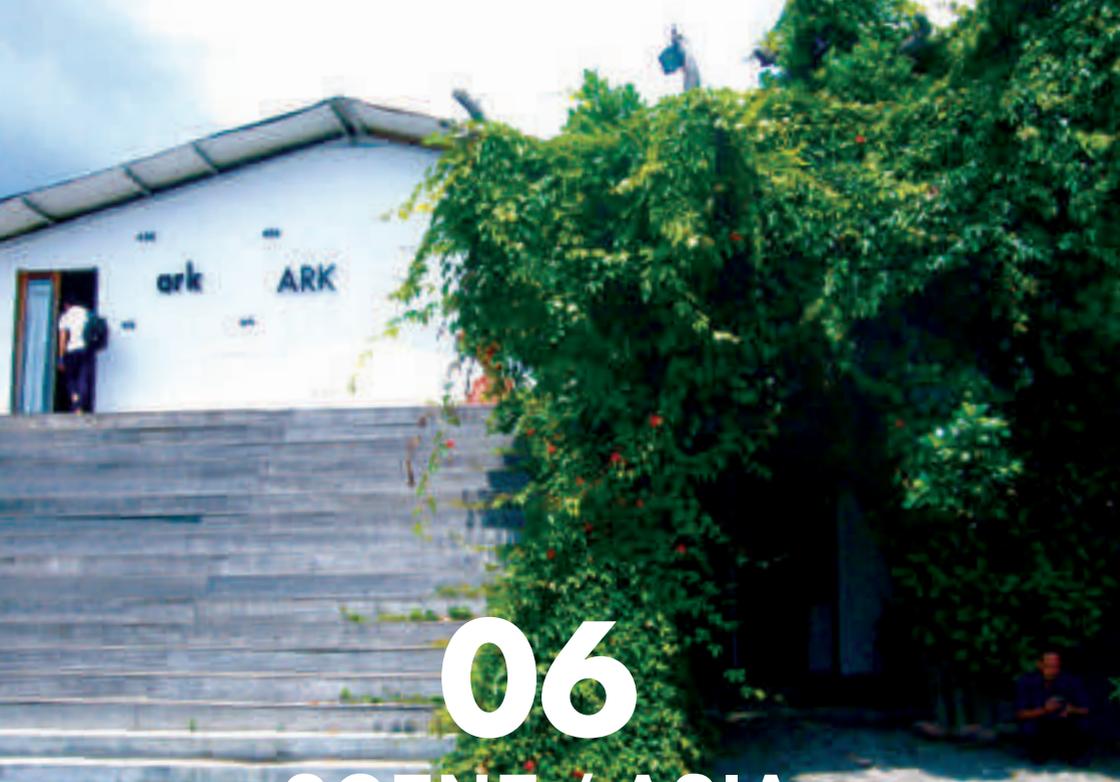
『残響世界』 世界初演



日本統治時代、ハンセン病患者を強制隔離した収容施設「楽生院（のちに楽生療養院と改称）」。台湾を代表する映像作家チェン・ジエレンは、そこに生きた人々や、施設の取り壊し反対運動に参加した学生らにカメラを向け、静謐な映像インスタレーション『残響世界』を発表した。今回のレクチャーパフォーマンスは、その映像作品を自らのナラティブと大胆な空間演出によって発展させたものとなった。かつて「不潔者」として差別されてきたハンセン病患者だけではなく、政治に異議を唱えて「不穏者」として排除されてきた人々の側から世界を問い、最後は東京の都市空間に浮遊するパフォーマーの身体と声で、現在の新自由主義の中で不安定な労働を強いられる多くの「浮遊者」の問題へと接続した。

チェン・ジエレン
Chen Chieh-jen

1960年台湾生まれ。台湾を代表する映像作家、アーティスト。80年代の冷戦・戒厳令政権下の台湾で、当時の政治体制を挑発するようなゲリラスタイルのパフォーマンスや展覧会活動を展開。戒厳令解除後は数年間の沈黙期間を経て1996年より創作活動を再開、主に映像と写真を用いた作品を制作している。現代社会が抱える問題を、実在する場所や人物をリアルに撮影しつつ、フィクションとして制作する。また、実際の社会問題に対してアクションを起こすプロセスを作品に組み入れるなど、その活動は芸術活動にとどまらない。ヴェネツィア・ビエンナーレ、光州ビエンナーレ、上海ビエンナーレなど国際展に多数参加。主な個展はクイーンズ美術館（2008年）、台北市立美術館（2010年）など。台北在住。



06 SCENE / ASIA



2015
9-

MEDIA | EDUCATION



SCENE / ASIA: アジアの観客空間をつくる

キュレトリアル・チーム

チーフ・ディレクター
岩城京子

ウィリアム・アンドリュース
大館奈津子
鈴木理映子
相馬千秋
[以上、芸術公社]

シェン・ルイジュン [中国]
キム・ヘージュ [韓国]
ソ・ヒョンソク [韓国]
ジェイソン・ウィー
[シンガポール]
ゴン・ジョジュン [台湾]
ツォ・ファンツイ [台湾]

アニュアル・シンポジウム ゲスト
ファーミ・ファジール
[マレーシア人民正義党主席報道官、
ファイブ・アーツ・センター]

リサーチ協力
グ・チョア・グアン
[Toccat Studio]
フェレンシア・フタバラート
[Hivosプログラム・オフィサー]
アリア・スワスティカ
[ジョグジャカルタ・ビエンナーレ
共同キュレーター]

スタッフ
ウェブデザイン | 庄野祐輔
アートディレクション |
佐藤直樹 [ASYL]

第1回ミーティング | 2015年7月20日-23日 Grey Project (シンガポール)

キックオフ・イベント | 2015年9月8日 国立アジア文化殿堂(ACC) (韓国・光州)

東南アジアリサーチ | 2015年12月2日-9日

インドネシア、マレーシア3都市 (ジャカルタ、ジョグジャカルタ、クアラルンプール)

第1回アニュアル・シンポジウム | 2016年2月16日 SHIBAURA HOUSE

オフィシャル・ウェブサイト創設 | 2016年2月29日

主催 | 特定非営利活動法人 芸術公社

助成 | 独立行政法人 国際交流基金アジアセンター、公益財団法人 セゾン文化財団
連携機関 | 国立アジア文化殿堂(ACC) (光州)、Ruangrupa (ジャカルタ)、

Toccat Studio (クアラルンプール)

ウェブサイト | <http://www.scene-asia.com>

アジアの舞台芸術界の人々と言葉を交わす際、採用される批評言語が、西洋文脈に基づくものであることに対する違和感が「Scene / Asia」設立の発端であり、アジア規準の舞台芸術批評言語を構築し、アジアの同時代人と問題意識を共有することを目的とする。2015年7月、シンガポールに複数国のメンバーが集い、第1回ミーティングを実施。数日間に及ぶ議論から、アジアでは批評規準を構築する以前に、批評意識を持って舞台にのぞむ観客がそもそも少ないという結論に至った。そこで、本企画を「観客空間をつくる」プロジェクトとして始動させることに。4言語(日・韓・中・英)構成のウェブサイトには、あえて批評軸をクリアにすべく、毎年ひとつのテーマに沿いキュレーションされた記事のみを集めることに決めた。2015-16年のテーマは「変容する舞台:民主主義を翻案する」。ACCリサーチ&アーカイブでのキックオフ・イベントを経て、12月にはインドネシアとマレーシアのリサーチを実施。2016年2月には第1回アニュアル・シンポジウムを開催し、アジア5地域のメンバーのほか、マレーシア人民正義党主席報道官のファーミ・ファジール氏を招聘した。2月末にはウェブサイトをオープンし、キュレーション・プラットフォームとして本格的なスタートを切った。[岩城京子]



CONCEPT

芸術批評を通じて、
アジア各地域に
「あらたな観客空間」を
つくりだすプロジェクト

「Scene / Asia」は、アジアの「社会背景（ソーシャル・シーン）」と「舞台（ステージ・シーン）」を知り、その知をアクティブに体験するためのキュレーション・プラットフォーム。現代のアジア諸地域で勃発する政治、宗教、社会問題などを知ることで、各作品がなぜその土地から生成されたのかという文脈理解を深めていく。

Curation
キュレーション

アジア5地域からなるキュレトリアル・チームが、各地域で近年上演された身体を用いたコンテンポラリーアートを、年間テーマに沿って隔月ごとに公式ウェブサイトで紹介。「アニュアル・キュレーション」として発表する。

Symposium
シンポジウム

各国キュレーターやゲストを招聘し、「キュレーション」で紹介されたアートに紐づく諸問題を話し合う「アニュアル・シンポジウム」を開催する。

Research
リサーチ

東南アジア各国への視察・交流・記事執筆を3年にわたって行い、パフォーミング/パフォーマンス・アートにまつわる言論整備を目指す。



Scene / Asia ウェブサイト



東南アジアリサーチの様子



キックオフイベントの様子

2015-16年キュレーション・トピック

変容する舞台: 民主主義を翻案する

近年、アジア各国で民主主義を希求する運動が様々なかたちで浮上している。オンラインとオフラインの二重生活を送る若者たちは、インターネットで見聞する西洋型民主主義が、フィジカルな日常で体现されていないことに不安と憤りを抱きはじめている。しかし、そもそも西洋近代からの輸入思想である「立憲民主主義」は、そのまま現代アジアで通用するのだろうか。開かれた公共空間、個人と社会の共存、表現の自由といった大文字の概念が、身体ではなく頭脳のみで了解され、存分な議論がなされることもなく、「あいまいな民主主義」がインフレを起こしている。2015-16年の「Scene / Asia」では、「民主主義こそが理想である」という拙速な結論を腑分けする議論をアジアのパートナーと展開。その議論を深める各国の芸術作品と社会理論の紹介に取り組んでいる。

間、個人と社会の共存、表現の自由といった大文字の概念が、身体ではなく頭脳のみで了解され、存分な議論がなされることもなく、「あいまいな民主主義」がインフレを起こしている。2015-16年の「Scene / Asia」では、「民主主義こそが理想である」という拙速な結論を腑分けする議論をアジアのパートナーと展開。その議論を深める各国の芸術作品と社会理論の紹介に取り組んでいる。

TOPIC

MAP



2015年9月8日

② | キックオフ・イベント

Asia Cultural Complex (韓国・光州)

韓国光州に竣工したばかりの国立アジア文化殿堂(ACC)内にある、リサーチ&アーカイブにて、「Scene / Asia」の対外的なお披露目となるキックオフ・イベントを開催。アジア5地域からなるキュレトリアル・チームのメンバー全11人(ジェイソン・ウィーはシンガポールからSkype参加)が登壇した。

2016年2月16日

④ | 第1回アニュアル・シンポジウム

SHIBAURA HOUSE (日本・東京)

5つの地域から10名のキュレーターが東京に集い、それぞれの社会が抱える課題と、それらに応答するアーティスト、作品を紹介した。また、チーフ・ディレクターの岩城京子がインドネシアでのリサーチの報告を行ったほか、マレーシアで政治家としても活動するファイブ・アーツ・センターのファーム・ファジールが、現地の政治状況と芸術活動との関係について講演した。

2015年12月2日-9日

③ | 東南アジアリサーチ

ジャカルタ
ジョグジャカルタ(インドネシア)
クアラルンプール(マレーシア)

チーフ・ディレクターの岩城京子と台湾出身のキュレーター、ツアー・ファンツィが、インドネシア、マレーシアを訪問。2015-16年のキュレーション・トピックに従い、各地の「民主主義」の歴史と現状、芸術活動のあり方について調査した。その概要は2016年2月に行われたアニュアル・シンポジウムで報告されたほか、ウェブサイトにも掲載された。

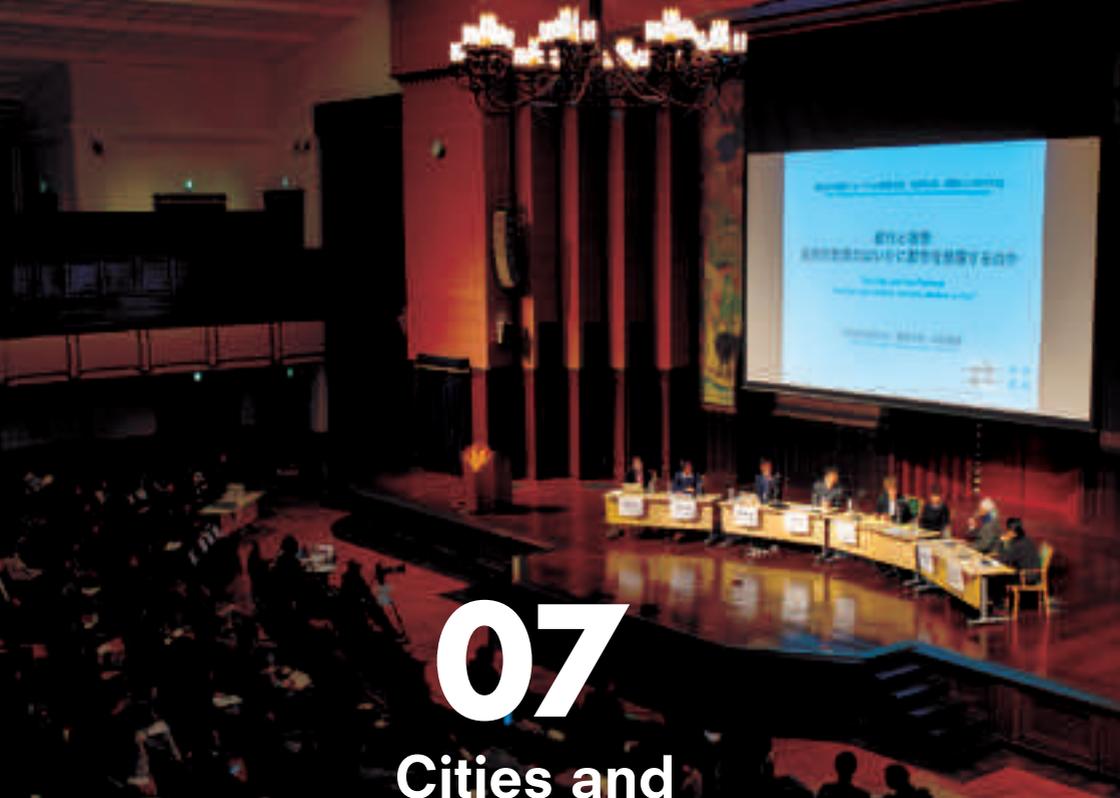
2015年7月20日-23日

① | 第1回ミーティング

Grey Project (シンガポール)

今アジアのアートシーンは何が問題となっているのか？ 我々は目指すのか？ そのために具体的に何

をしていくのか？ 「Scene / Asia」の主要メンバー5人がシンガポールに集まり、3日間にわたって集中的に議論を重ねた。その成果として、年間のキュレーション・トピック「変容する舞台: 民主主義を翻案する」が決定。



07 Cities and Festivals



2015
3.3

MEDIA



国際シンポジウム 都市と祝祭:芸術的想像力は いかに都市を覚醒するのか

2016年3月13日 東京大学 本郷キャンパス 安田講堂

主催 | 社会の芸術フォーラム、特定非営利活動法人 芸術公社

協力 | 東京ドイツ文化センター

ウェブサイト | <http://skngj.blogspot.jp/2016/01/symposium02.html>

企画・コーディネート

相馬千秋

パネリスト

アメリー・ドイフルハルト
[ハンプルク・カンプナーゲル劇場芸術監督、世界演劇祭2017 芸術監督]

磯崎新 [建築家]

吉見俊哉 [社会学者、東京大学]

高山明 [演出家、Port B主宰]

桃原慎一郎

[東京都生活文化局次長]

司会

相馬千秋

北田暁大

[社会学者、東京大学、
社会の芸術フォーラム共同代表]

通訳

岸本佳子

Art Translators Collective
(田村かのこ、相磯展子)

スタッフ

社会の芸術フォーラム事務局 |

竹田恵子、井上文雄、岡沢亮

制作統括 | 戸田史子 [芸術公社]

制作アシスタント |

藤井さゆり、林弥生

編集・広報 | 柴原聡子、橋場麻衣

宣伝美術 | 木村稔将

撮影 | 青山真也

書籍手配 | 渡辺淳

オリンピックを控えた東京において、あらためて「都市における祝祭」の意義を再定義すべく開催された国際シンポジウム。第1部は各登壇者によるプレゼンテーション。磯崎新氏は、北京の天安門と東京の皇居前が「禁園」に隣接し、歴史的な事件を経て首都の象徴的空間になったとの論を展開、新国立競技場の空地と皇居前をつなぐ構想を発表した。高山氏は「路の祝祭」と題し、東京を舞台にした自身のツアー型の作品群と、歌舞伎や舞踏など「みち」で展開されてきた舞台芸術の原型をつなぐ考察を行った。ドイフルハルト氏は、ベルリンの「禁園」として長年閉鎖されていた旧東ドイツ国会議事堂「共和国宮殿」を舞台にしたフェスティバルや、芸術監督を務めるカンプナーゲル劇場における難民問題への応答と取り組み、2017年開催の「世界演劇祭」の構想を語った。吉見氏は1969年に発生した安田講堂事件の映像で過去を想起させつつ、自らの都市論の延長線上に考案された「東京文化資源区」のプランを発表。第2部では、桃原氏が2020年に向けた東京都の文化ビジョンと事業フレームを紹介。続いて「みち」をキーワードに、一点集中型ではなく、都市の異なる地点や「異質なもの」同士をつなぐ新しい再編成を「祝祭」と読み替える議論が展開された。磯崎氏からの「流民の街である東京が、難民を受け入れられるか？」という問いには、アートは社会課題に対して具体策の提案ではなく問題提起を続けるべきとの意見もあり、社会への応答としての芸術的想像力の可能性を問うアクチュアルな議論の場となった。[相馬千秋]

DIALOGUE

東京と台南。
二つの芸術公社、発足の年を振り返って

相馬千秋× ゴン・ジョジュン対談

2014年に東京で発足した芸術公社は、同時に台南でも発足した。
二つの芸術公社はそれぞれどのような目的をもって生まれ、どのようにアジアを考え、
この1年活動してきたか。東京芸術公社の代表を務める相馬千秋と、
台南芸術公社のディレクターであるゴン・ジョジュンが語りあった。

相馬千秋(芸術公社代表理事)、ゴン・ジョジュン(台南芸術公社代表理事)
モデレーター | 林立騎(芸術公社) 通訳 | 杜可柯

ゴン・ジョジュン(龔卓軍)
1966年、嘉義(台湾)生まれ。国立台湾大学哲学部博士課程修了。2007年、国立台南芸術大学視覚芸術学院で准教授(美術論・美術批評・美学)に就任。2009年より季刊批評誌「Art Critique in Taiwan (ACT)」の編集長を務める。キュレーターとしても活動中。また、G. パシュール、M. メルロ＝ポンティ、C.G. ユングの中国語(繁体字)翻訳者でもある。



アジアにフォーカスする理由

——東京の芸術公社は、なぜアジアにフォーカスするのでしょうか。

相馬 私自身、フランスでアートを学びましたし、西欧をベースにした芸術の思想は否定できません。けれど今、東京や日本でリアリティをもって感じていることを表現するのに、西洋の思想や歴史観だけでは私たちの「いま・ここ」を把握できない。そのときに、「隣人であり他者である」アジアを知ることで自分たちの地点を確認しなければならぬという意識をもつことは自然の流れでした。自分も含め日本人はあまりにも隣国の歴史を知らない、知らなくていいように教育されてきた。一方で支配を受けてきた側の人たちは、歴史を辿ることで自らのアイデンティティを構築している。こういう圧倒的に非対称な関係に無自覚でいてはいけない、まずはお互いを知ることから始めるべきだと考えました。そして、これらの問題に取り組むプログラムを実現するベースを作ることにしたのです。

——そこで、ゴンさんに声をかけたのですね。

相馬 ゴンさんに会ったのは2013年、「r:ead」というプロジェクトでした。そのときに、ぼんやりと考えていた芸術公社のアイデアを話したところ、賛同してくれて。名前についても『公社』という単語は、中国語だと『commune』というニュアンスで、政治的な意味合いが強い。だからこそ面白い」と言ってくれました。それを聞いてアイデアに自信をもちました。

翻訳の不可能性から生まれるもの

——ゴンさんが芸術公社に参加するようになったきっかけは？

ゴン 「r:ead」がきっかけです。このとき通訳や翻訳について多くのことを考えました。異なる言語の間には常に微差や齟齬がありますが、それは同じ言葉と話している者同士でも起きる問題です。「r:ead」はほとんど「翻訳の不可能性」に触れる経験でした。

このときの成果発表で侯孝賢が日本で撮影した映画『珈琲時光』を扱いました。映画には1920年代から日本に留学していた台湾の知識人の話が出てきます。当時の日本は、台湾にとって近代化の一部だったのです。そしてここには「翻訳のパラドックス」と呼ぶべき問題があります。日本語は、植民者の言葉であると同時に、近代化に参加するための言葉でした。日本は近代化の道具で



台南芸術公社 オフィスにて

ありながら、敵でもありません。台湾にとって、日本はそのような矛盾を孕んだ国なのです。台湾が植民地化されていた50年の間、台湾の家族はこの矛盾のなかで暮らしてきました。そして、現在はそのことに無自覚になりつつある。私も若い頃は日本語も日本文化も知りませんでした。しかしこの翻訳のパラドックスに直面することで、これをもっと深く考えていけば、二元論から抜け出し、台湾の現代性と歴史性を理解することができるのではないかと考えるようになりました。そうすれば、コミュニケーションの問題の次のレベルが見えてくるはず。もちろん、アートもその矛盾を越えることのできる重要なツールです。それが、相馬さんのコミュニケーションに対する問題意識と重なったのです。

——ゴンさんが考える、台湾にとってのアジアはどのようなものなのでしょうか。

ゴン 台湾は、帝国の周辺、異文化が衝突するところにある国です。そういった、中心ではない場所だからこそ見えるアジアの像、異なるアジアの概念があるのではないのでしょうか。ある中国の学者が唱えている興味深い説では、17世紀のオランダ東インド会社のように、地球上に新しいルートを作ることは、「潜在的翻訳プロセス」を進めることだと言います。翻訳は、国力の競争だけでなく、相互理解にもつながりうるのです。台南の芸術公社のコンセプトはここに見出せると考えています。

現在のアートの役割

——東京、台南におけるアートの役割を、それぞれどうお考えですか。

相馬 東京は、世界の各都市と比べれば安全ですし、様々なもののクオリティが均質です。それは良いこととされていますが、だからこそ、歪んでいる気がします。こういった社会の歪みを指摘するには、現状を物語化し共感を与えるやり方と、現状を告発するやり方の二通りがあって、前者は映画・演劇・テレビなどで展開される無数のドラマ、後者はドキュメンタリー番組やジャーナリズムが担っています。現在のアートは、この二つのパターンにとどまっているものがほとんどで、その先を提示しているものは稀だと思います。芸術公社では、単なる問題の物語化でも、告発でもない、その先を提示できる方法をアーティストとともに発明していきたいのです。

ゴン 私の家族はもともと中国大陆から台湾へ渡って来たので、私は台湾の民俗とは無縁のまま育ちました。でも、一度台南を離れ、また戻って来たときに、自分は台南のことを何も知らないと感じたのです。そこで、台南の歴史や文化を調べ始めました。たとえば、地域のお寺の前にある「廟埕」という小広場は、昔から祭りや演劇に使われてきた伝統的なパブリックスペースでした。今もその名残はありますが、だいぶ薄れてきてしまっています。ほかにも、伝統的な絵画である台湾画は、20世紀初頭に日本で洋画や日本画を勉強した人たちが日本の「文展」のシステムを持ち込んでから、正統な絵画として認められなくなりま

” 私はアーティストではありませんが、現地の問題をリサーチし、問いを提供することです。—— ゴン

した。このように、近代以降、台湾では民俗的なものが評価されなかった傾向がよく見られます。この矛盾を考え直すべきだと思っています。

2018年には坂茂設計の台南美術館が完成します。若いアーティストは期待していますが、むしろ独自の活動を進めた方がいいのではないかと思います。私はアーティストではありませんから、できるのは、現地の問題をリサーチし、問いを提供することです。出版やワークショップを通じて美術制度や芸術と社会の関係を考え、美術館ができるときにきちんと向き合えるといいと思っています。

生活に根差した芸術

—— この1年、台南芸術公社はどのような活動がされてきたのでしょうか。



ゴン氏が手がける美術雑誌『KAU-PUÉ』

ゴン 大きく分けて、三つあります。ひとつめは、雑誌を作ったこと。近々ウェブサイトも立ち上げる予定です。台湾の民間信仰と現代美術の関係を探り、示していくことがねらいです。二つめは、港千尋さんと一緒に、水交社というかつての日本の海軍将校宿舎をリサーチし、これにまつわる記憶を掘り起こすプロジェクトです。図面を資料と照合していくことで、かつての住人を8割方突き止めるまでに至りました。三つめは、高山明さんと進めているプロジェクトで、これは「都市の記憶」をテーマにしています。

—— ゴンさんの関心や台南芸術公社の活動は、実在する場所との関係が深いように思います。とくに、台南芸術公社が立ち上げと同時にオフィスを構えたことが印象的でした。



ゴン その通りです。鶴見俊輔が1956年に書いた『限界芸術論』は、プロが作り出す純粋な芸術とも大衆芸術とも異なる、日常生活から生み出される身ぶりや言葉で「限界芸術」と称し、その重要性を説いたもので、私はこの論に共感するところが大きいです。儀式もその一例だと思いますが、もう一度生活に密着した場所に戻り、生活に根差した芸術を作りたい。それは場所に潜む精神性を引き出すことにもつながります。

池袋にある法明寺に、井上有一の書を碑にした《幽顕之塔》がありますね。あれはお寺にある墓石と混じって、一見作品だとわからない。日常と芸術が有機的につながっている。私が考える場所と生活と芸術のつながりが、あの作品の佇まいにあります。これらを、リサーチや対話、出版という活動を通して実践していきたいと考えています。

相馬 今のお話を聞いて、なぜ台南のアーティストや研究者が民俗学的なアプローチに熱心に取り組むのかがわかりました。世界中に民俗をテーマにした現代美術はたくさんありますが、台南という土地だからこそ、現代美術が民俗を扱う必然があるのだと思います。同じ



台南芸術公社オフィス



ことを東京でやるのは、たぶん違う。そこに二つの芸術公社の違いが表れるのではないのでしょうか。

二つの芸術公社のこれから

—— 今後の活動について教えてください。

相馬 芸術公社が始めたプロジェクトのプログラムがフォーマットとなって、アジア各地を回遊していくのがいいなと思っています。たとえば、「Scene / Asia」は共通のテーマを各都市で考えていくプログラムですし、「r:read」は東京の次に台湾で、続いて2015年は韓国で、それぞれその地域の人々が主導して開催しています。今回は香港での開催を予定しています。「r:read」も「Scene / Asia」も、ある程度決まったメンバーが毎回参加するプログラムです。短期間かつ1回限りで終わるのではなく、繰り返し顔を合わせて関係を育むことで生まれるものに手ごたえを感じています。逆に、外に向けて発信するプロジェクトとして「レクチャーパフォーマンス・シリーズ」があります。2016年はこういった外向きのプロジェクトに、より力を入れてい



台南芸術公社と高山明が行ったワークショップ

きたいと考えています。

ここ数年、アジアではアートの箱モノがどんどん増えていて、日本ではまちおこしや観光をねらったアートフェスティバルが乱立している状況です。それぞれに個性があればよいのですが、現実には「越後妻有トリエンナーレ」的なモデルが各地域に展開されているという印象です。こうした既存のモデルとは違う独自のアプローチを、東京とアジアを往復しながら発明していきたい。あとは場所が欲しいですね。やはり直に顔を合わせることは重要です。

ゴン 台南芸術公社が主催する、現代美術家20人のグループ展を予定しています。会場は、台湾に7つ作られ、ひとつだけ残っている日本植民地時代の製糖工場で、この場所にまつわる複雑な歴

史も調べています。この展覧会はキュレーターが作品を選んで展示する一般的な方法を採用せず、展示の作り方そのものをテーマにしています。先ほどお話しした台南の民俗のリサーチもこの一環で、2015年、2016年とリサーチ、対話、議論を続け、2017年にはそれらのサマリーとして展覧会を開催します。今年は、おもに写真と民俗の関係を探っていこうと思っています。台湾に限らず、東南アジアの民俗は芸術にとって重要なインスピレーション源です。民俗もそうですが、アジア諸国で同じトピックを話し合う機会が広がっていけばよいですね。

(2016年2月18日 SHIBAURA HOUSEにて)

DIRECTORS

芸術公社のディレクターによるエッセイ

芸術公社は、異なる専門性を持つ13名のディレクターからなるコレクティブである。プロデューサー、エディター、リサーチャーなど、多彩なスキルを持つ複数のディレクターがプロジェクトごとにユニットを組み、リサーチからリアリゼーションまでを担当する。ディレクター13名が、2016年3月までの1年を振り返るエッセイを寄せた。

ウィリアム・アンドリュース

William Andrews

ライター、翻訳者。英国生まれ。キングス・カレッジ・ロンドン卒。2004年から日本滞在。日本の戦後社会運動とカウンターカルチャーを研究した『Dissenting Japan』を2016年に上梓。

「commons」の意味

—— 芸術公社の英語名 Arts Commons Tokyoについて、「public」や「society」ではなく、なぜ「commons」という言葉なのでしょう。

私は生まれがイギリスで、2004年から日本に滞在して、演劇とアートを専門分野に、翻訳、編集、コピーライティング、執筆などを行っています。

広く捉えると「commons」には、土地もインターネットも、みんなで共有する資源という意味があります。最近ではクリエイティブ・コモンズという組織がかなり有名になりました。英語圏でも「commons」という言葉を聞くと、とても幅広いイメージがあります。でも、コモンズとはもともとごくローカルなもので、コミュニティという概念に関連しているようです。例えば、昔は実際にコミュニティにコマンズという現象がありました。中世にさかのぼると、貴族が自分の土地の一部を普通の人 (commoner) に分けて農業などで使わせる、コモン・ランドとよばれる場所がありました。今でもイギリスの多くの田舎の町や村には、その名残でコモンと呼ばれる、みんなのための場所が残っています。

一方、「public」には、例えば「public art」という言葉があります。これは、一般的に野外に展示されている作品を意味しますが、それに複数形の「s」を加えた「public arts」は、公的な助成金をもらっている芸術になります。ですが私は、政府や助成金というニュアンスよりも、場所・スペースの方がより大事ではないかと思っています。例えば、ここ SHIBAURA HOUSEは、地元の人々がお弁当を食べたり、勉強をしたりと、自由に使えるスペースとしても機能しています。民間のスペースですが、オープンでありパブリックです。また、渋谷駅には、岡本太郎の《明日の神話》があります。屋外ではなく、政府や自治体が管理する場所ではないですが、「ぶつうの人=パブリックの人」のためのものとして、毎日何千人もの目に触れ、まさにパブリックアートとして機能しています。

「public」が「おおやけ」の「公」だとすれば、共有地やみんなのための資源を指す「commons」は「共に」の意味の「公」であると言えます。芸術公社は共同性としての芸術に関心を寄せているので、組織名として Arts Commons Tokyoがふさわしいと考えました。（「芸術公社設立シンポジウム」での発言より抜粋）



岩城京子

Kyoko Iwaki

パフォーマンスアーツを専門とするジャーナリスト及び演劇研究者。東京とロンドンを拠点に世界24カ国で取材。朝日新聞などに和英両文で執筆を行う。ロンドン大学ゴールドスミス校博士課程在籍、ならびに同校非常勤講師。

アジアの時間と場所が、対等に出逢うプラットフォーム

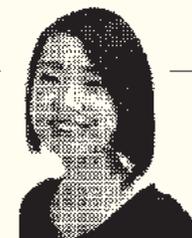
英国アカデミズムに身を投じてからの5年間は、いかにわたしたち日本人が、西洋近代の歴史観に適合するよう、補完的で、受動的な物語を語られてきたかということ、身を以て実感する時間だったように思う。そもそもその国の言葉で物語を編みあげるといふ行為は、相手の思考法を内在化していく営みだ。

日本語は、自他の輪郭があいまいで、螺旋状に内容をくり返し、解釈の余地を残す修辞法を好む。だが英語は、主体を明解に、いかに簡潔に、ひとつの意見を貫くかが文章の鍵となる。「多義的なあいまいさ」を美德とする前者と、「論理的なトランスパランシー」を善とする後者。ミハイル・バフチンは特定の「時間」と「場所」が交わる結節点で文化は生まれると述べたが、日本人女性であるわたしからするとこの定義は補足を要する。つまり文化は確かに、特定の「いまここ」が交わる結節点で生まれる。が、それは多くの場合、権力の覇者にたぐり寄せられるかたちで生成されるのだと。

さて、この1年の芸術公社での活動は、「Scene / Asia」の設立に重点が置かれた。詳細な活動内容についてはウェブサイトを参照して欲しいが、簡単に述べるなら、これ

はアジアの同時代を生きる舞台芸術関係者及び観客と、批評言語と問題意識を共有するためのプラットフォームである。この活動の一環で、本年度は、シンガポール、光州、ジャカルタ、ジョグジャカルタ、クアラルンプールを訪れたが、この途次で、わたしはある種のおそろしさを感じていた。つまり、英国滞在中とは反対に、自分がパワーバランスの覇者になり暴力をふるえてしまえる事実へ気づいたのだ。この意識はなにも、日本人がアジア圏では暴力の加害者である、という歴史認識に基づくだけのものではない。そうではなく、アジアで流暢な英語を話せる／相手に英語を話させるという行為自体が、ある種の暴力であるという事実へ気づいたのだ。

わたしの理解に即すかたちで、相手が配慮して話している。その事実へ気づいてからは、わたしはできるかぎり相手に寄り添い、シンプルな英語で問いかけるよう心がけた。無論、いちばんの解決策は、相手の言語を話せるようになること。それも長期的な目標としては、今後「Scene / Asia」を、様々なアジアの時間と場所が「対等に出逢えるプラットフォーム」として育てたいと願っている。



宇波恵

Megumi Unami

エディター、リサーチャー。国際会計事務所勤務、海外での実務経験を経て、2015年からドイツ在住。様々な国際展で舞台芸術や現代アートの制作に関わるほか、海外誌への寄稿や展覧会の企画開催等も手がける。

ドイツに住む外国人として感じる社会と芸術の関係性

ドイツに住んで1年が経つ。ヨーロッパと呼ばれる地域、そしてドイツという国も、バックグラウンドや関心を異にする多様なコミュニティの集まりであると感じる。地理的には同じ地域に住んでいても、異なるコミュニティに属する人とあまり交わることはない。最近では難民に関するニュースを毎日耳にする。2015年だけで100万人超の難民がドイツにやってきたという。異なる文化を持ち、多くがイスラム教徒の難民が大量に流入していることに不安を抱く人が増える中、右派が台頭している。

昨年末リミニ・プロトコルというカンパニーによる演劇作品『Quality Control』を観た。若い頃に水深が浅いのを知らずにプールに飛び込んだところ、首を怪我して頭から下を動かせなくなった中年の女性が、舞台の上で自分の体験と日々の生活を語るものだ。事故の後に病院で、障害を抱えたまま生きるべきか否かを自ら選択させられたというエピソードが語られる。人生を愛していると美しい笑顔で語る彼女。一方で、ドイツではヒトラーが台頭した時代に、障害者は社会から排除されるべき対象として殺害されたと収容所の映像が流れる。家族や友人に障害を

抱えた人がいるという場合を除き、日常において重度の障害を持つ人と関わる機会はあまりない。彼らがどのような境遇にあり、何を考えているのかを想像することもない。芝居の中でも語られるように、障害は多くの確率で後天的に発生するもので、事故などによって私たちがいつ同様の状況におかれてもおかしくはないのだけれど。舞台の上で彼女の独白を聞きながら、自分であったらそのとき生きる選択をしたかどうか、彼女のように笑顔で人生を肯定できるだろうか考えた。芝居の中では、個人の体験や思考が生々しく語られる。演劇という装置を通じて、赤の他人や知らない事象を非常に近く感じられることがある。身近な人であっても「他者」と分かり合うことは難しい。しかし、同じ時代や場所を共有する人たちのことに思いを馳せ、他者とつながる努力を続けることは、コミュニティが断絶しているように感じられる現代の社会において、異なる集団からなる社会を維持し機能させるために、重要な基盤ではないだろうか。舞台芸術を通じて、私たちは他者とつながるきっかけを得られるのかもしれない。



大舘奈津子

Natsuko Odate

一色事務所に在り、荒木経惟、森村泰昌、笠原恵実子、やなぎみわのマネジメントに携わる傍ら、『ART iT』の編集を行う。「横浜トリエンナーレ2014」ではキュレイトリアル・アソシエイツを務めた。

「レクチャーパフォーマンス・シリーズ」を中心に

芸術公社設立から1年が経過した。その間に日本では、集団的自衛権を容認する安全保障関連法案成立、更にはマイナンバー法や改正労働者派遣法の施行など、2014年末に施行された特定秘密保護法と合わせ、日本国民がもつ自由は徐々に狭められつつある。今年はいよいよ日本国憲法の改憲へ、と進みつつある状況を目の前に、自由と不可分の存在である芸術がどう存在しうるか自問する機会が増えている。

「レクチャーパフォーマンス・シリーズ」はそういう「いま」の日本において、まだ多くの予算を持たない芸術公社ができることとして行った、芸術の側からのひとつの応答である。芸術公社における特徴のひとつとして、海外との交流を積極的に行っていることがあげられるが、そうした関わりを通じ、特に社会的・政治的に厳しい環境をもつ国に、しっかりと創作を続けるアーティストがいる実情をメンバーが見聞していたこともあり、彼らがどのように作品を制作し、そしてそれを継続しているかについて、彼ら自身の言葉を強く聞きたいと考えた。レクチャーパフォーマンスという形態のみを考えれば、このような観点に特化する必要もないのであ

るが、2016年の東京で「いま、ここ」を考えるときに、内省的もしくは自らの表現のみに還元される作品やアーティストは少し違うだろう、と思ったことは否めない。

そのような経緯で、コロンビアからロルフ・アブデルハルデン／マバ・テアトロ、台湾からチェン・ジエレンを招聘することとなった。前者は演劇の、後者は美術のフィールドで国際的に活躍しているが、3日間のみという短い公演にもかかわらず、二人とも実に真摯に、自国で制作した作品の取り組みを語りながら、現在の東京の状況を反映した「アップデート」を実行してくれた。両者ともに過去の出来事や歴史について語り、どこにその問題が依拠していたかを彼らなりに分析し、かつそれが現在の問題に密接に関わっていることを示し、そしてそれを未来に向けてどうすべきか、観客自身に考えさせる余地を大いに残していた。彼ら自身の国の出来事にもかわらず、観客が自らの経験を想起し、重ね合わせる体験をもたらすようなアプローチで、より身体的に染み込むものであった。2016年4月以降は、日本のアーティストとの協働や、場所を限定しない「更新」にも取り組んでいきたいと思っている。



影山裕樹

Yuki Kageyama

編集者、プロジェクト・エディター。雑誌編集部、出版社勤務を経てフリーに。アート、カルチャー書の出版プロデュース・編集を行う傍ら、様々なプロジェクトに編集者として関わる。著書に『大人が作る秘密基地』など。

批評的態度を持って、社会と向き合う

芸術と社会の関係を考える際、当然そこには批評が欠かせない。しかし、近年は各芸術分野の批評のニーズが減り続けているように思う。それは、単に読者が減少して発行部数が減り、広告費も減り、雑誌を継続して出し続けるのが難しい状況に出版業界が置かれているからである。裏を返せばそれは、芸術文化を消費する経済的に安定した中間層が減少しているために、国内や海外で日々発表され続ける作品を丁寧に論じるだけでは、読者の“切実さ”を満たすことができないからかもしれない。

だから、限られた読者向けに出版される業界紙や同人誌を除けば、批評を掲載する出版物に求められているのは、常に特定分野の外にいる新しい読者を呼び込むことだろう。今や、アートワールドを縮小再生産する“作品批評”ではなく、芸術文化が置かれている環境や文法自体を読み替える“状況(メタ)批評”にこそ、批評の価値基準をずらす時期がきているように思う。

このことに意識的な書き手やメディアは少なからず存在する。大澤聡の『批評メディア論』はまさに、文芸批評それ自体ではなく、書き手が置かれた環境、経済・時代状況を丹念に読み解いたものだった。ともすると作品批評は作品と同じか、その次く

らいにありがたがられるが、一方でその批評を掲載する出版の制度や経済は“縁の下”の事情として忘れ去られる。大澤は意識的に、この作品-批評-出版のサイクルの外縁にフォーカスを当てていたように思う。

では、批評それ自体は社会の役に立たないのだろうか。いや、そんなことはないだろう。批評とは、言葉である以前に“態度”だと考えればいい。ジャック・リヴェットが「卑劣さについて」というエッセイの中で、アウシュヴィッツをことさら悲劇的に描こうとする情緒的なカメラワークを批判した。それは映画固有の文法を、表現一般の倫理の問題へとひきずり出す。このように芸術生産に携わる者の態度表明が、批評可能な領域を拡張することもある。しかし、こうした態度は作家や批評家だけに許されたものではないだろう。

芸術生産の外縁に立ち、様々な作品を世に送り出し、その社会的意義を問うてきたメンバーによって構成されている芸術公社。私たちはその都度アーティストと並走し、表現技法を開発し、芸術と社会が接する面を探り続けてきた。今度は“つなぎ手”である私たちが、機会創出、制度設計、出版・言論活動など一連の事業を通して、その“批評的態度”を示す番だろう。



鈴木理映子

Rieko Suzuki

編集者、ライター。早稲田大学第一文学部卒、青山学院大学総合文化政策学研究所修了。演劇情報誌「シアターガイド」編集長を経てフリーに。演劇専門誌などでの取材・執筆のほか、舞台芸術関連の出版物の編集を行う。

日本の舞台芸術と「公」

ここ数年、日本の戦前から戦後にかけての商業演劇を支えた俳優やスタッフの聞き書きプロジェクトに携わっている。彼らの話を聞いていて印象的だったことのひとつが、財界人との公私にわたる交流だ。宝塚歌劇団を主な舞台に、家庭向けの「国民劇」の創設を訴え自ら創造の現場を指揮した小林一三(阪急東宝グループ創始者)のような例だけでなく、新人の制作者、あるいは新劇人が名だたる財界人のご馳走になり、好きな芝居について語り、時には便宜も図ってもらった、という話は数限りない。どれも「メセナ」という言葉もなかった時代の話。日本の舞台芸術の近代は、資本家たちの存在なくしてはありえなかっただろう。むしろ90年代以後、さまざまな助成金や公共劇場の制度が充実するにつれ、そうした交流のエピソードは聞かれなくなる。

2月に行われた「Scene / Asia」のアンニュアル・シンポジウムのテーマは「変容する舞台:民主主義を翻案する」であった。西洋由来の「民主主義」を各地域において再考、再定義するという前提のもと、アジア各国のキュレーターが、それぞれの暮らす社会が抱える歪みに触れ、それに応答するアーティスト、作品を紹介するなか、公共空間に持ち込まれる新自由主義、抽象的で批判のし

ようがないスローガンのみが許される社会(そのこと自体が、一種の「突破口」ともなるのだろう)に言及したシンガポール在住のジェイソン・ウィーのプレゼンテーションは、日本の近未来を見るようで、特に印象に残った。

今や日本の舞台芸術の資金の担い手の多くは、一部の大規模興行を除き、公的なものへと移ったが、かつての資本家たちとの交流ほどにも、つくり手と「公」に携わる人々とは、芸術のあり方について、語り、共有する機会を持たれていないのではないかという疑念が頭をもたげる。内容、スタッフ、キャストが商業劇場とほとんど変わるところのない作品が公共劇場で上演されることもあれば、小劇場出身のつくり手の先鋭的な作品がその閉鎖性や収益性を厳しく問われることもある。

とはいえ、日本の舞台芸術と「公共」との歴史は浅い。伝統芸能を主として上演する劇場を除けば、公共劇場と呼べる施設もせいぜい設立25年程度。まだ若いと言える今こそ、あらためて「芸術」と「公共/公」との関係問い、言語化し、共有していく試みを「芸術公社」を通じて積み上げていきたい。また、その議論がジャンルを越え、これからの社会を考える種となることを願っている。



須田洋平

Yohei Suda

弁護士（日本・米国ワシントン州）。東京大学法学部、ワシントン大学ロースクール、ナント大学メトリーズ卒業。2006年に日本で弁護士登録。芸術と人権に関わる事案を経て、芸術の公共性に関心を寄せている。

社会の創造に立ち向かった1年

「芸術公社設立記念シンポジウム」において、芸術の社会創造機能について触れた。社会という概念は、もともと自立した個人が互に関係性を結ぶということを前提にしている。しかし、日本を含む非西洋世界では、自立した個人という前提条件が整っていないことも多い。芸術公社の2015-16年度は、そのような制約を踏まえつつ、社会を創造するという壮大な試みに立ち向かった1年であった。

新しい社会の創造には、絶えずこれまでになかった視点、アイデアという名のエネルギーの流入による既存の秩序の破壊、カオス状態の創出、そして、これまでとは異なる社会という新たな秩序の、カオスからの生成のプロセスが必要になってくる。この点、芸術公社は、既存の枠にとらわれない視点やアイデアを芸術を通じて提供することに関して、この1年で相当の手応えをつかんだといえよう。

例えば「Scene / Asia」である。今年度の「Scene / Asia」のテーマは、「変容する舞台：民主主義を翻案する」である。ウィンストン・チャーチルが「民主主義は最悪の政治形態である。ただし、これまでに試みられたそれ以外のすべての政治形態を除けば」と述

べるように、民主主義はとりえず善であるという所与の条件があるように思われる。しかし、「Scene / Asia」は、それに対する容赦ない疑問を、芸術を通じて投げかけ、カオス状態を創出している。もちろん、そこでは、アジア各国のアーティストの試みを紹介することにより、カオスの先にある新たな秩序形成に向けたエネルギーの投入も忘れずに行われている。今後の展開が非常に楽しみである。

また、「レクチャーパフォーマンス・シリーズ」も芸術公社が日本に初めて持ち込んだ意欲作として特筆すべきである。普段は自身の作品に表立って登場することのないアーティストが、自らの言葉で自身の問題意識を伝えるという手法は斬新であった。アーティストが既存の価値観に対する問題意識を直接観客に投げかけるという手法自体が、観客が客体に止まることができず、問題意識を受け止めることでアーティストと同様にその場における主体とならざるをえない点で、カオス状態の創出だと言える。そして、カオス状態の中にも、特にアーティストと日替わりゲストとの対話（ダイアログ）が新たな秩序の種を含んでおり、非常に面白かった。



相馬千秋

Chiaki Soma

アートプロデューサー。早稲田大学、リヨン第二大学大学院卒。「フェスティバル/トーキョー」初代プログラム・ディレクター等を経て、国内外で多数のプロジェクトのプロデュースやキュレーションを行う。

お金のことをやった1年

芸術公社設立から1年。この1年のリアルな実感は、とにかくお金のことをやった、ということ、これに尽きる。最初にメンバー13人から3万円ずつ出資金を出してもらい、設立シンポジウムの前後で30万程度のご寄付をいただき、さらに自分のなけなしの貯金から30万を加え、合計100万円弱の資金からスタートした。

この1年、いったい何本の企画書や申請書を書いただろう。設立間もなく主催事業の実績のない芸術公社が申請できる助成金は少ない。それでも私は毎日のように企画書、予算書を書き、お金集めに奔走した。結果的に、1年目にして合計200万円程の事業規模になった。これは、小劇場の中堅劇団が年間1~2本の主催公演を打つくらいの規模だろうか。小さなギャラリーの年間運営費くらいだろうか。幸いにも前払いの助成金もいただくことができ、なんとか借金をせずに1年目を乗り切れている。少ないながらも関わってくれた方々に謝金をお支払いすることもできている。これもひとえに、通常ではありえない値段でロゴやアートディレクションを手がけてくださった佐藤直樹さん率いるASYL、港区の一等地のスペースをほぼ無償で使用させていただいているSHIBAURA HOUSEの伊藤勝社長、危なっかしい芸術

公社の経理・税務面を一手に引き受けてくださっている会計士・税理士の山内真理さんはじめ、有形無形のサポートをくださった多くの方々の善意のおかげである。この場をお借りして、心から御礼を申し上げたい。

ところで私は正論を言いがちな人間で、そのことについては一応自覚している。正論は所詮正論、実際世の中はそうじゃないし、そんなことも言っても無駄だよ、という冷やかな反応をよく浴びる。世間的にも空気を読めない人だと思われるに違いない。それでも私は、芸術公社をやる限り胸を張って正論を言い続けたいと考えている。それが、自腹を切ってインディペンデントにやっている唯一の強みだからだ。そして芸術公社のメンバーは、私以上に正論を言う人が多い。みんなそれぞれにプライドが高く、一匹狼で、群れることがない。そしてその孤独をどこか引き受けている人が、ゆるやかに集まって、言いたいことを言い、必然性があれば行動を起こす。それが現時点の芸術公社の実態であろう。私たちは、Commune（共同体）ではなく、Commons（個々の集合）なのだ。私は芸術公社の活動が、正論さえ言うことのできない窮屈な今日の社会の中でますます重要なものになると、勝手に確信している。



平昌子

Masako Taira

主に現代美術のジャンルで展覧会やイベント等の広報、PRを行う。近年の活動に、ヴェネチアビエンナーレ日本館、「PARASOPHIA:京都国際現代芸術祭2015」、「恵比寿映像祭」他。

芸術公社設立1年を経て

私は現代美術のジャンルを主とした外部PRとして、さまざまな団体や企業と仕事をしています。PRとは、行われる事業の目的とその広報ミッション(目標)を事業主と共有し、公共の場に向けてPR活動をどう組み立てるのかを話し合い、実行することが基本となります。常に内側(組織)と外側(公共)の間で、両方とコミュニケーションをとる、その連続です。この数年は国内外で実施されるフェスティバル形式の現場を経験させていただく機会に多く恵まれましたが、この「フェスティバル」がなかなかのくせ者で、「何が目的で行われるのか?」を関わっている人たち自身が共有できていないケースが意外に多い。「それぞれが異なる目的で事が進んでいる?」と感じる現場も少なくありませんでした。そのような場合、我々PRは時には二枚舌三枚舌を使う必要があり、結局は、数だけで測られる従来型の広報活動を求められることになってしまいます。

私が芸術公社に入ったきっかけは、掲載数だけでないPRの可能性を追求してみるという大切な視線との出会いでもありました。日本には、アートの現場もその他のジャンルにも批評がないと言われていました。昨今のメディアでは、情報拡散のための事前紹介が

ほとんどで、レビューの場が圧倒的に少ないのです。そのような状況において、ひとりの作家の作品についてじっくりと向き合い、事業についての成果をメディアや評論家とともに検証する機会をもっと作ってゆきたいと思いついたのです。

昨年春に、アラブ首長国連邦で開催された「シャルジャ・ビエンナーレ」に、「ミーティング」という1週間ほどのセッションがあり、その一部を体験しました。アーティストはもちろん、ジャーナリストやキュレーターが、プレゼンテーション、セッション、ランチやディナーを共にしながら、少しずつ議論がなされていくプログラムで、フェスティバルの一環としてそのような機会が予算に組み込まれていることにも刺激を受けましたし、とても参考になりました。

ここ芸術公社においては、「芸術を通して公の場を考える」ことを、PRの立場から考えてみたい、「芸術公社メンバーと実験をした」と思っています。本年度はお手伝い程度でしたが、なかでも「レクチャーパフォーマンス・シリーズ」のコモンズ・トークのような対話の機会にもっと時間を取り、オーディエンスが参加しやすい方法などを、再度メンバーで話し合っただけでいいと思います。



戸田史子

Fumiko Toda

コーディネーター、制作、翻訳。早稲田大学建築学科卒業後、ベルリンに3年弱在住。帰国後はパフォーマンスを中心に、海外アーティストの国内公演や国内アーティストの海外公演の制作、映像翻訳等を行う。

「レクチャーパフォーマンス・シリーズ」を終えて

今年度は、2016年2月に開催された「レクチャーパフォーマンス・シリーズ」の制作統括を行いました。芸術公社設立以来、初の主催公演、海外アーティスト2組を招聘する第1回目の試み、そして、劇場ではない空間での上演という条件がありながら、初心を思い出しつつゼロから制作していく楽しさ(と、大変さ!)を存分に味わえた現場となりました。

前半のロルフ・アブデルハルデン/マパ・テアトロ、後半のチェン・ジエレン共に、リハールサルを重ねて作り込んでいく劇場作品とは異なり、公演前日に会場入りし、翌日に本番というスケジュールでした。その短期間で、演出家であるロルフ・アブデルハルデン、映像作家であるチェン・ジエレンならではの細部へのこだわりの差異を体感できたのも、今後、専門分野の異なるアーティストと同じ枠組みで制作していく上での良い経験になりました。

少々裏話を。当初、ロルフ公演の客席は縦長使いではなく、横長使いでした。彼は、来日してすぐに三面ガラス張りの会場を訪れ、

夕刻にサラリーマンが建物を取り囲むように帰路につく姿を目にし、是非ともその光景を公演の背景として取り入れたい、と提案したのです。スクリーンサイズと客席レイアウトは直前に変更になりました。そして、本番中に目にした、サラリーマンたちが早歩きする姿が、どこかいつもと違って見えたのは印象的でした。

対してチェン公演はとてもミニマルな構成で、膨大な情報量に対し、観客が息をひそめて集中するように作り込まれた作品でした。観客がガラス越しに見るマンション屋上のシーンは、「できるだけ外は寒い方が良い」というチェンさんの思いが通じたのか、翌日から急激に気温が下がり、本番には適切な(!)気温になっていたのも面白かったです。

今回の試みは、レクチャー(講演)/パフォーマンス(公演)、通訳/パフォーマーなど、境目が場面ごとにゆらいている感覚がありました。どこまでどう演出するのか、制作サイドにもよい意味で課題が残る試みだったと思います。第2回も楽しみにしています。



林立騎

Tatsuki Hayashi

翻訳者、演劇研究者。翻訳の理論研究と実践を続けながら、広義の翻訳の実践に携わる。一般社団法人Port観光リサーチセンター所長。東京芸大特任講師。訳書にイェリネク『光のない。』、共編著に『Die Evakuierung des Theaters』。

「社会」へのまわり道

「社会的なものというこの奇妙な領域」。ジル・ドゥルーズが「社会的なものの上昇」という小論で使った表現だ。曰く、「社会的なものは公的なものと私的なものとの新たな雑種の様態をもたらし、国家の介入とその撤退の、国家の負担とその軽減の再配分、独自の絡み合いを自ら作り出す」。すなわち「社会」の概念は、わたしたちの生の「変動通貨」として、公的なものと私的なものの変動的配分を許すあやうい場になっているという。

「社会」は近代以来、契約の場であり結果として考えられてきた。社会契約というこの物語は、一般的には参政権の行使を通じた選挙によって更新される。だが参政権をもたない声がわたしたちのまわりには溢れている。国籍によって、年齢によって、すでに死んでしまったこと、あるいはまだ生まれていないことによって、さらには動物であり、物であり、自然環境であることによって、声として数えられない無数の声。そうした声を聞き取ることで社会契約の物語を別の角度から更新しようとするはたらきは、芸能や芸術によって担われてきた。

芸術公社が謳う「芸術と社会の新しい関係」とは、両者のより直接的な関係のことでないだろう。芸術は今や社会の中にしかありえない。芸術の課題は、今以上に最短距

離で社会につながることも、むしろいかに社会の中にありながら社会に出会い直すためのまわり道をつくることができるかということだ。社会に立ち向かうよりも、ひととき社会から遠ざかり、しかし遠ざかることで別の社会を構想する、デモンストレーションよりはストライキのような機能。政治経済や国籍の論理を離れ、生きている人間だけの視野を切り替え、山川草木や動物や死者やまだ生まれていない者たちやありえたくもされない別の今ここを迎え入れながら、自然、都市、歴史にこれまでとは別の関わり方を見出していく。

わたしたちの生きる個人的物語を法権利の及ばない秘密として包みながら、それが無数に散らばることで、いくつかの星座が見出され、それが社会的物語になるかもしれない。個人々の物語を太陽のようなひとつの社会契約／物語に統合するのではなく、暗い時代に星を散らし、それぞれの距離の中に複数的な「社会」をイメージする。豊かなまわり道をつくりだすことで、日に照らされた社会の一体性をほぐし、わたしたちの中に無数の闇をつくりだし、多様な「社会」のイメージを生成する、そうしたものとしての芸術が必要とされているのではなかろうか。

望月章宏

Akihiro Mochizuki

上智大学文学部卒。カルチャー誌の編集部を経て、アートやファッション、カルチャー分野での企画・制作・PRのプロデュースやディレクションを行う。

近くから伝えること

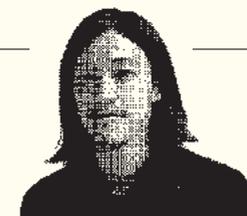
私は、普段はアート関係のPRのほかに、映像制作、イベント企画など、いろいろな立場で活動をしています。大手の広告代理店やPR会社ともよく仕事をしていますが、大手ではどのようにコンテンツを世に届けているのかを垣間見ることがあります。よく知られているように、クライアントの発信したいメッセージを、テレビ・ラジオ・新聞などのマスコミと呼ばれるものを通して広く遠く発信するというのが彼らのひとつの方法です。そのやり方がアートフェスティバルやアートプロジェクトなどで作家や作品を扱う場合にどれだけ親和性があるのか、また通用するだろうかと考えることがあります。

2012、2013年に、「フェスティバル/トーキョー（以下、「F/T」）」のPRを担当しました。当時、「F/T」の内部では異常なまでに議論が重ねられており、PRである私たちには「その議論のすべてを外に伝えて欲しい」という要求がありました。正直、驚きました。しかも、内部の議論にとどまらず、トークイベントや「批評家inレジデンス」のように、言葉を尽くすことがフェスティバルの構造のなかにコンテンツとして組み込まれていて、更には、プレスリリースやパンフレット、チラシも膨大な数に上りました。PRという立場ではそれまで経験したことのない情報量ではあったので

すが、でも、それを外部に伝える方法はあると思っていました。なぜなら、アートや演劇の世界では、遠くで受け取るのではなく近くに来て聞いてくれる人たちがいることも知っていましたし、ライターや記者、編集者が決してメジャーなコンテンツではなくても興味を持ち、問題意識を共有しているとわかっていたからです。結果、持ちかけた企画が反響を呼び、鑑賞後にも活発なコミュニケーションが生まれるなど、「F/T」内部の議論がきっかけとなり、「F/T」の言論が違う意味での「広さ」をもって伝わったと実感しています。私はこれに大きな可能性を感じ、芸術公社の活動においても、考え方や言葉の使われ方を理論化し、伝えていくことを自分のミッションと捉えています。

個人的な考えですが、芸術公社の特徴は、メンバーにアーティストがいないことです。作家ではない私たちがアートを実践することはできません。でも、私たちのような周縁で生まれる言葉や考えを、大きな声ではなく小声でも、近いところから伝えていくことで、作品をつくるアーティストと、その作品を受け取る側の両方に影響を与えられるようになればいいと思います。

（「芸術公社設立シンポジウム」での発言を再構成）



若林 朋子

Tomoko Wakabayashi

プロジェクト・コーディネーター、プランナー。公益社団法人企業メセナ協議会プログラム・オフィサーを経てフリーランスに。多様な領域でソーシャルプロジェクトのコーディネート、執筆、編集、調査研究等に取り組む。

われら独立自尊の仕事人

私は、芸術公社が展開するプログラムにまったく貢献できていないので、プログラム以外の面で芸術公社を分析してみようと思う。

芸術公社の特徴のひとつは、ワーカーズ・コレクティブであることだ。最近さまざまな領域で広がりをみせているが、ワーカーズ・コレクティブとは、メンバーが共同で出資し、全員が対等な立場で経営に参画し、社会に価値やサービスを提供する経営事業体のこと。雇用／被雇用の関係ではない働き方だ。我々芸術公社も、小さな額（代表は多額！）ではあるが共同出資することから始まっており、全員が対等な立場で運営、活動に関わっている。メンバーはそれぞれ専門領域を持ち、芸術公社以外の自身の仕事にも従事している。極めて独立性が高い。芸術公社という組織の「雇われ」であるという感覚は、全員持ち合わせていない（聞いてみたことはないが）。これは、非営利／営利の違いや、法人形態の違いからくるものではない。働き方や事業経営についての考え方が、雇用を前提とする文化組織や芸術団体とは異なるということ。芸術公社は、他では手掛けないようなプログラムに取り組んでいるだけでなく、メンバーの働き方や活動の取り組み方においても、新しい

価値観で動きはじめたのだ。

もちろん、こうした事業体は、安定した事務局運営のための専従人員の確保やメンバーの活動時間の調整といった点において、難しさはある。実際、代表は苦勞していると思う。しかし、個々のメンバーのネットワークの厚みや専門性の高さ、積極的な意味での効率のよさ、責任を引き受ける潔さが可能にしてきたアウトプットの質の高さには、身内でありながら驚くばかりである。長らく組織に雇われて働き、フリーになって2年目の自分にとっては、自立した個々の働きがコレクティブとして機能する様子に、大いに刺激を受け、幾度となく仲間たちを尊敬した1年だった。

誰に頼まれたからでもなく、自分がつくり出したいもの、世に問いたいものを表現する。やらされ仕事にしない。できないことを所属組織のせいにするのもない。すべての責任は自ら引き受ける。

創造という領域においてもっとも大切なのは、独立自尊の精神。芸術公社のワーカーズ・コレクティブというあり方に、あらためて思うのである。

芸術公社クレジット



芸術公社ディレクター

相馬千秋[代表理事]
大館奈津子[理事]
若林朋子[理事]
須田洋平[監事]
ウィリアム・アンドリュース
岩城京子
宇波恵
影山裕樹
鈴木理映子
平昌子
戸田史子
林立騎
望月章宏

国際アドヴァイザー

ハンス＝ティース・レーマン
[演劇批評家・理論家]
ジャン＝ルイ・ボナン
[フランス・ナント市文化顧問]
ゴン・ジョジュン
[国立台南芸術大学教授]
赤坂憲雄
[民俗学者、学習院大学教授、
福島県立博物館館長]

アートディレクション

ASYL
[佐藤直樹+中澤耕平+菊地昌隆]

ウェブディレクション

古屋蔵人
竹田大純

制作スタッフ

田村かのこ
田中沙季
藤井さゆり

インターン

田邊裕子

芸術公社の活動は、以下の個人法人の皆様からのご支援をいただいております。

協力団体

SHIBAURA HOUSE

芸術公社スタートアップ応援基金 寄付者ご芳名

名誉サポーター
勝呂隆男様

特別サポーター
赤坂憲雄様
蛭川敦子様

サポーター
青木俊輔様
大岡寛典様
岡室美奈子様
ゴウライトリ様
Bas Valckx様
福田桃子様
三鶴泰正様
山本理顕様
吉本光宏様

フレンズ
12名の皆様



芸術公社アニュアル 2015-2016

2016年3月31日発行

発行

特定非営利活動法人 芸術公社

編集

柴原聡子

橋場麻衣

—

影山裕樹

鈴木理映子

相馬千秋

林立騎

(以上、芸術公社)

アートディレクション&デザイン

加藤賢策(LABORATORIES)

デザイン協力

北岡誠吾(LABORATORIES)

フォトクレジット

Naoki Yamamoto (pp.42,43,45,47-50,53,54)

Shintaro Wada(p.52)

上記以外は各ページに記載

印刷・製本

株式会社アトミ

芸術公社ウェブサイト

<http://artscommons.asia/>

お問い合わせ

contact@artscommons.asia

禁無断転載・複製

©2016 Arts Commons Tokyo All Rights Reserved.

Printed in Japan.